

広島県

事務局 〒736 広島県広島市安芸区船越南3-16-1 船ニッポー内
日吉 秀樹 TEL082-822-4557

〈沿革〉

協会創立に至る経緯

ウエイトリフティングが広島県に産声をあげたのは昭和25年である。それまで広島県におけるウエイトリフティングは全く白紙の状態であった。26年の広島国体開催が決定し、ウエイトリフティングは三原市で開催されることになった。25年に三原市では開催準備として組織作りから始められ、県協会が誕生することになった。

三原市で競技に使用するバーベルに似た車両を作っているという、それだけの理由で中日本重工三原車両製作所(三菱重工三原製作所の旧名)が競技の開催準備を担当することになった。その結果、会社の中に県協会が設立され、同製作所長の多賀祐重が会長、岡田勇が理事長となり、同所の従業員を中心に選手育成が行われた。

広島国体を目指し三原車両では従業員食堂を会場に練習が始まった。しかし、広島県には競技の経験者も指導者もいなかったため、競技先進県の岡山県から板谷兄弟を招き指導を受けたりもした。練習には三原車両のほか、東横三原、日本セメント糸崎工場等からの参加者もあり100人程度の同好者が集まっていた。

〈年次別概況〉

昭和25年

広島国体開催を目指し、広島県ウエイトリフティング協会が三原市の中日本重工三原車両製作所内に設立された。会長は同所長、理事長は同所厚生課長が兼務した。以後、昭和44年まで会長・理事長は同所の所長・厚生課長が兼務した。

昭和26年

広島国体ウエイトリフティング競技は三原市の広島大学三原分校・講堂で開催された。広島県からは、岡田勇監督以下、稲村秀夫、金子仁、門之内幸夫、

岡田順三、横田敏夫の5選手が出場した。しかし、1年少々の練習で選ばれた速成選手達ばかりであり、各選手が自分の実力を発揮するのが精一杯で十分な成績をあげることはできなかった。県協会が誕生して僅か2年で、全国大会を開催するには大変な苦勞があった。しかし、国体に初めて選手を出場させると共に、本県競技関係者が大会運営を行った意義は大きかった。そして、この広島国体開催で広島県のウエイトリフティングは本格的にスタートしたと言える。

昭和28年

三原車両製作所の強力な支援により県大会は所内で行われていた。競技の愛好者も多く盛大に大会が開催され、次第に競技力も向上していった。

この年、新居浜市で開催された国体では、Fe級の門之内幸夫(三原車両)がP70kg、S80kg、J95kg、T245kgの記録で5位に入賞した。

この門之内が全国大会で入賞した最初の広島県選手である。

門之内は翌29年の北海道国体でもT255kgの記録で4位に入賞した。

昭和34年

山口県で開催された全国高校選手権大会でB級の影山彰男(三原高校)がT265kgを挙げて優勝した。この影山が広島県で最初に全国大会で優勝した選手である。

昭和35年

県協会は創立以来10年が経過し、そのあいだ役員や選手の殆どが三菱三原の従業員で占められていたので、大会等の活動は会社の中で行われていた。その結果、会社外での競技普及が思うように進まなかった。

さらに、広島国体開催で育った選手達も大会に出場しなくなり県協会の活動が衰退傾向にあった。

このような中で、影山彰男が発起人となり、宇田実、亀山清治、木村典司、多門徹夫らが県重量挙げ愛好会を結成

歴代会長

初代 多賀 裕重 (昭和25年～)

第2～6代は三菱重工三原製作所
所長が会長を兼務。(昭和30～)

第7代 橋高 良実 (昭和44年～)

第8代 岡本 繁 (昭和52年～)

第9代 日吉富英夫 (平成6年～)

し、三菱三原以外でも競技の普及活動を行なうと共に、選手の方で大会開催や選手育成を始めた。その後、この愛好会の活動は着実に成果をあげ、選手層も次第に厚くなっていった。

この年の東京国体で、影山彰男がF級5位に入賞した。

昭和36年

三菱広島にも重量挙げ同好会が結成され従業員が練習に励んだ。三菱広島から、この年の秋田国体に出場したF級山本羽吉は6位に入賞した。

昭和40年

呉市体育館で広島・愛媛対抗重量挙げ大会が開催され、24対13で広島が勝った。広島勢はF級山本羽吉、B級木村典司、Fe級得能義孝、L級多門徹夫、M級三宅雅行が1位の成績であった。

この年の、岐阜国体でF級木村典司(三菱三原)が8位に入賞した。

昭和41年

第3回全日本社会人選手権、職域対抗で三菱広島が2位、個人でB級山本羽吉が3位、F級橋本年孝が6位に入賞した。43広島全国高校総体のウエイトリフティング開催地が府中市と決まり、開催地では橋高良実(府中市教育

長)、金只章宏(市教育委員会)、川瀬泰司・菅波次郎(市体育協会)、橋高道行(府中高)池田葆(北川工)等々を中心に開催準備が始まった。また、選手育成のために、府中・北川工・パ手商・電大付の4校で県高体連の中にウエイトリフティング部を組織し選手を集め、影山彰男や亀山清治、真野正、等々の県協会役員が指導に当たった。その結果、第1回県高校ウエイトリフティング選手権大会を11月に府中高で開催することができた。

昭和42年

43年全国高校総体開催が県協会としても当面の課題であり、選手の育成・競技役員養成のために強化練習会・審判講習会等を開催して取り組んだ。

そして、県高体連に協力して、初めて

の県高校総体ウエイトリフティング大会を行い、さらに43年全国高校総体・リハーサル大会として第1回中国高校選手権大会を府中市で開催した。この年の福井での全国高校総体に山岡正秀(電大付)と黒瀬信行(府中)が参加し、Fe級黒瀬信行が10位に食い込んだ。

昭和43年

「強く・正しく・美しく」を大会スローガンとして広島全国高校総体が開催され、ウエイトリフティングは府中高体育館で行われた。

府中市では、前夜祭としての「5万人の集い」や「花ひと鉢運動」を行い大会を盛り上げた。郷土選手も地元の声援に応え、川原田正人(戸手商)が8位に入賞し、学校対抗で北川工が34校中18位と健闘した。この全国高校総体開催で府中市にウエイトリフティングが根を下ろすことになった。

国体中国九州予選でB級鶴飼峰生(戸手商)、Fe級川原田正人(戸手商)、L級佐長武実(北川工)の3選手が3位に入賞した。

全日本社会人選手権(長崎)で、B級橋本年孝が2位に入賞した。

昭和44年

前年の全国高校総体開催を機に、競技を県内に幅広く普及していく目的で県協会を全県的な組織にしようとする気運が盛り上がった。その結果、会長・理事長職が三菱三原製作所から離れ、府中市教育長・橋高良実が会長、影山彰男が理事長として、新しい県協会がスタートした。

国体中国九州予選でL級原田博之(北川工)が3位に入賞した。

昭和45年

競技が中国地区各県へ普及し一般競技者も増え、第1回中国選手権大会が岡山県で開催された。この大会でF級森江友行(三菱三原)、B級鶴飼峰生(大商大)、Fe級真野正、M級三宅雅行(三原体協)がそれぞれ優勝した。

全日本社会人選手権大会で、Fe級真野正が5位に入賞した。

昭和46年

和歌山国体でF級善教進(佐伯産業)が7位、B級鶴飼峰生(大商大)が5位に入賞した。

善教進は山陽高から愛知学院大へ進学し、卒業と同時に広島へ帰り県立体育館などで、夜間に練習に励むなど恵まれない環境のなかで競技を続けていた。そして、この年の全日本社会人選手権大会でも2位に入賞した。

昭和47年

下関市で開催された、中国高校選手権大会でFe級松葉親治(北川工)が初優勝し、F級で菅康博(電大付)も2位に入賞した。松葉親治は全国高校総体でも10位に入った。

鹿児島国体でF級善教進、B級鶴飼峰生が入賞した。

昭和48年

この年から、Pが廃止されSとC&Jの2種目で競技が行われることになった。

県高体連に西条農が新加盟し各大会へ出場した。

全日本社会人選手権大会でL級真野正が2位に入賞した。

昭和49年

北川工が市移管により府中東として出場することになった。また、田頭信夫(府中東高校長)が県高体連ウエイトリフティング部長及び県協会副会長に就任した。全日本社会人選手権大会でF級善教進が優勝、L級真野正が2位に入賞した。第5回中国選手権大会を広島で開催し、F級善教進、B級鶴飼峰生、Fe級西辻憲三(三菱三原)、L級真野正、MH級赤木(広工大)が優勝し、3年連続の団体優勝を成し遂げた。

昭和50年

この年から、県協会理事長に亀山清治(三菱三原)が就任した。県協会への加盟団体は三菱三原・三菱広島・県立体育館同好会・YMCA・MBクラブ・広島市協会・府中市体協・三原市体協・広工大・近大呉・高体連と全県的な組織になっていた。

出雲市で開催された、中国高校選手権大会でB級平賀政美(電大付)が2位、LH級金森紀文(府中東)が3位に入賞した。

昭和51年

県協会創立25周年記念大会を県立体育館で開催した。

全日本選手権大会で、F級鶴飼峰生(新市町役場)が4位、善教進(佐伯産業)が5位に入賞し、両名が日韓親善大会の日本代表選手に選出された。

日韓大会(ソウル)では、F級鶴飼峰生が優勝し最優秀選手賞を授与された。

下関市で開催された中国高校選手権大会でLH級金森紀文(府中東)が優勝、金森は全国高校総体でも8位に入賞した。佐賀国体少年の部に岩崎修宣・岡本富男・金森紀文の府中東勢が出場した。

昭和52年

長年ご尽力いただいた橋高良実会長がご逝去されたことにより、広島市の病院長・岡本繁が県協会会長に就任した。

2月、モンテリオール・オリンピックの八木監督・平井選手らを招いて強化講習会をYMCA体育館で開催した。倉敷で開催された、全日本選手権兼日ソ友好大会で52kg級の善教進、鶴飼峰生が4、6位に入賞した。

昭和53年

全日本選手権大会で、52kg級善教進(佐伯産業)が3位に入賞した。善教はトルコのイスタンブールで開催されたベクル国際大会に亀山清治監督(県協会理事長)と共に出場し、52kg級2位に入賞した。

広島市ウエイトリフティング協会が設立され、会長に林輝児、理事長に木戸正が就任した。

昭和54年

全日本実業団選手権大会で、三菱重工が3位に入賞、また中国高校選手権大会で、60kg級相方隆宏(府中東)が2位に入賞した。この年は、高校の競技選手が非常に少なかった。

昭和55年

県体協、市体協との関係上、事務局を広島市のYMCA体育事業部へ移すことになった。そして、林輝児が県協会副会長に、多門徹夫が県協会理事長に就任した。そして、県協会創立30周年記念大会と式典を開催した。

全日本実業団選手権大会で、52kg級善教進が優勝、団体で三菱重工が4位に入賞した。新居浜で開催された全国高校総体では、67.5kg級前雄二(広島工)が7位に入賞した。前は栃木国体でも67.5kg級で6位に入賞した。

昭和56年

県協会理事長に、多門徹夫に代わり木戸正が就任した。

下関市で開催された、中国高校選手権大会で82.5kg級西田義文(広島工)が2位に入賞した。

昭和57年

6月、中国高校選手権大会が広島県立体育館で開催され、60kg級高橋徹(広島工)が2位に、82.5kg級西田義文(広島工)も2位に入賞した。西田義文は島根国体でも8位に入賞した。

また、8月に中国選手権大会も広島県立体育館で開催され、団体の部で広島県は岡山県について2位であった。

昭和58年

県協会理事長に島重章(広工大)が就任した。新理事長の肝入りで広工大・近大呉・県内出身者で編成した大商大の3校による第1回県大学対抗選手権大会が開催され広工大が優勝した。

第1回全日本社会人シニア選手権大会

で、67.5kg級真野正(真野商店)が優勝した。

昭和59年

全日本マスターズ選手権大会で、56kg級田中一寿(三菱広島)、67.5kg級真野正の両名が優勝した。

中国選手権では52kg級戸板弘美、岩本節雄、60kg級河重浩司、100kg級金森紀文らが活躍した。課題であった競技人口も広島大、近大興など大学への普及で活況をみせはじめた。県秋期大会では中学生でオープン参加した影山博文(三原五中)の活躍が話題になった。

昭和60年

全日本マスターズ選手権大会で、67.5kg級真野正が3年連続優勝した。

中国高校選手権大会で、56kg級大谷誠(広島工)が2位、60kg級新田勝久(広島工)が3位に入賞した。また、中国選手権大会では、52kg級岩本節雄(三菱広島)、56kg級水島(広島大)、60kg級河重浩司(MBクラブ)、90kg級秀浦忠弘(MBクラブ)らが活躍し、団体で2位になった。2月に広島大で広川京一氏(西日本学連会長)を招き役員・選手講習会を実施した。

昭和61年

60kg級新田勝久(広島工)が、中国高校選手権大会で大会新記録を樹立し優勝、また全国高校総体のJで優勝、さらに国体で3位と大活躍した。

67.5kg級影山博文(三原東)も1年生ながら中国高校選手権大会で優勝した。

67.5kg級真野正が全日本マスターズ選手権大会で、4年連続優勝という輝かしい記録を残した。また、60kg級河重浩司(東洋シート)も全日本実業団選手権大会で2位に入賞するなど、本県選手の活躍には目を見張るものがあった。

昭和62年

67.5kg級影山博文(三原東)は、2年生ながら中国高校選手権大会で優勝、全国高校総体で2位、国体で4位と大活躍した。中国高校選手権大会では、52kg級東岡光治(広島工)が2位、75kg級小田英法(府中東)が3位に入賞した。全日本マスターズ選手権大会で、56kg級江上寛之(三菱広島)が優勝した。また、中国選手権大会で、52kg級堀井正雄(広島大)、60kg級河重浩司(東洋シート)の両名が優勝した。

昭和63年

この年は、本県選手が全国的に大活躍した年であった。父親、影山彰男の指導の下に着実に実力を付けてきた75kg級影山博文(三原東)は全国高校総体で

6位と不本意な成績だったが、国体ではS1位、J2位の見事な成績を収めた。また、本県で開催した中国高校選手権大会では3年連続優勝という輝かしい記録を樹立した。他に、中国高校選手権大会では、56kg級備後幸彦(広島工)と、82.5kg級重政知宏(府中東)が2位、60kg級升田義之が3位に入賞した。新田勝久(広島工一法大)が全日本大学対抗選手権大会56kg級で優勝、全日本ジュニア選手権大会60kg級で2位に入賞し、アテネで開催されたジュニア世界選手権大会の日本代表に選ばれた。また、全日本マスターズ選手権大会で、56kg級善教進(佐伯産業)が優勝した。12月に米国オークランドで開催された世界マスターズオープン選手権大会で、56kg級江上寛之(三菱広島)が優勝した。

平成元年

全国中学選手権大会で、56kg級上原大介(海田西中)はSに80kgの中学新で優勝した。

中国高校選手権大会で、52kg級山本潤(府中東)が2位に入賞した。また、県高校総体に本県で最初の女子選手、52kg級今井ゆう子(広島工)、60kg級中下綾子(広島工)が出場した。

国体で、成年52kg級東岡光治(ニッポー)がSで、成年60kg級新田勝久(法大)がJで入賞した。ワールドマスターズ大会56kg級40~44歳の部で江上寛之(三菱広島)が優勝した。全日本実業団選手権大会で、67.5kg級河重浩司(東洋シート)が2位に、52kg級東岡光治(ニッポー)が5位に入賞した。

平成2年

国体成年の部で、60kg級新田勝久(法大)がJ2位、S8位、52kg級東岡光治(ニッポー)がSで6位、67.5kg級河重浩司(東洋シート)がJで7位に、少年の部56kg級上原大介(電大付)がS6位、J7位に入賞した。

新田勝久(法大)は、全日本学生個人選手権大会60kg級、全日本大学対抗選手権大会56kg級で優勝した。全日本実業団選手権大会で、52kg級東岡光治(ニッポー)がSで、60kg級河重浩司(東洋シート)がSで優勝した。

8月、中国選手権大会を府中市で開催した。広島勢は60kg級新田勝久(法大)、75kg級影山博文(立命大)が優勝、52kg級堀井正雄(MBクラブ)、82.5kg級岩室浩(中京大)、100kg級紀井亮(MBクラブ)が上位に入賞した。

中国高校選手権大会で、56kg級上原大介(電大付)が優勝、75kg級原嘉明(広島

工)が3位に入賞した。

平成3年

5月にアジア大会のリハーサル大会として、日中友好競技大会を新装の佐伯区スポーツセンターで開催した。中国男子10人、日本男女15人の選手が参加して競技が行われ、好記録が相次いだ。会場や競技運営に関しては好評で、県協会をはじめアジア大会準備関係者はアジア大会開催への自信を深めた。

国体では、成年75kg級影山博文(立命大)、少年56kg級上原大介(電大付)が入賞した。

全日本マスターズ選手権大会では67.5kg級真野正(真野商店)がS、Jで優勝した。中国選手権大会では、56kg級東岡光治(ニッポー)、60kg級升田義之(東洋シート)75kg級影山博文(立命大)、90kg級山田富穂(広島マツダ)の4選手が優勝した。

中国高校選手権大会で、52kg級小藤修宏(広島工)が優勝、56kg級上原大介(電大付)が2位、90kg級重田尚孝(広島工)が3位に入賞した。

平成4年

バルセロナ・オリンピックに56kg級新田勝久(広島工一法大一自衛隊体育学校)が出場し13位だった。広島県からのウエイトリフティング競技オリンピック出場選手は初めてであり、母校の広島工と県協会の主催で盛大に壮行式を開き激励した。

56kg級上原大介(電大付)は、全国高校総体で優勝、国体でもS1位、J4位と大活躍し、日韓ユース大会の日本代表選手に選ばれ2位に入賞した。この上原(電大付)の活躍は、中岡公治監督(電大付)の長年の苦勞に應えるものであった。

国体成年の部で、75kg級影山博文(立命大)がJ7位に入賞した。全日本実業団で、52kg級堀井正雄(ヒロテック)が優勝、全日本マスターズ選手権大会で、67.5kg級B真野正が優勝した。

全国中学選手権大会で、56kg級岩岡怜(海田西中)が2位に入賞、県秋期大会で101.0kgのJr日本中学新記録を樹立した。

中国高校選手権大会で、56kg級上原大介(電大付)が優勝、90kg級重田尚孝(広島工)が3位に入賞した。中国選手権大会では、52kg級堀井正雄(ヒロテック)、56kg級小藤修宏(広島大)、60kg級升田義之(東洋シート)、100kg級紀井亮(今井クラブ)の4選手が優勝し、団体の部は2位であった。

平成5年



貞政・高橋選手の祝賀会

県協会の都合により、理事長に森田善康が就任した。

6月に府中市で行われた、中国高校選手権大会では、松井雅和監督(府中東)の指導が開花し、54kg級高橋和徳(府中東)、76kg級貞政隆行(府中東)の2選手が優勝、穂積生郎(府中東)が3位に入賞し、団体でも府中東は2位に入る健闘をした。また、83kg級北谷新一郎(広島工)も優勝した。

8月に小山市で行われた、全国中学選手権大会で、56kg級岩岡怜(海田西中)がJで110kgの日本中学新記録を挙げ1位となった。

国体少年の部では、76kg級貞政隆行(府中東)がS1位、J2位と大活躍、また54kg級高橋和徳(府中東)、と83kg級北谷新一郎(広島工)も入賞した。成年の部では、70kg級河重浩司(東洋シート)が入賞した。全日本実業団選手権大会で、54kg級東岡光治(ニッポー)が3位

に、全日本マスターズ選手権大会で、70kg級真野正(真野商店)が7回目の優勝を成し遂げた。また、59kg級田中孝典(M.E.C)、100kg級秀浦忠弘(東洋シート)の2選手が2位に入賞した。

県高校総体では、54kg級城迫奈美(府中東)、59kg級高坂泉(府中東)の2人の女子選手が出場し活躍した。

平成6年

県協会役員を刷新してアジア大会を開催することになり、会長に日吉富美夫、理事長に熊本忠弘が就任した。

10月2日～16日にかけて半世紀前、被爆で廃墟と化した広島市に、42の国・地域から6,824人の選手団を迎えてアジア大会が開催された。ウエイトリフティング競技は佐伯区スポーツセンターで19の国・地域から男女151名の選手が参加して行われた。世界新記録42、アジア新記録55が誕生し、「平和への願い」と「肉体への感動」が一つになった盛大な大会であった。

中国高校選手権大会で、54kg級埴野将彦(広島工)、76kg級中山龍二(府中東)が優勝、59kg級西村和哉(広島工)が2位、54kg級山岡奨(府中東)と70kg級宮本尚樹(電大付)が3位に入賞した。

国体少年の部で、64kg級岩岡怜(海田高)がSで2位、76kg級中山龍二(府中東)が3位に入賞した。

全日本マスターズ選手権大会で、70kg級真野正が8回目の優勝をした。さらに、59kg級江上寛之(三菱広島)も3位に入賞した。国体記念杯女子選手権大会で、64kg級小川華奈子(鈴ヶ峰)が2位、59kg級高坂泉(府中東)が6位に入賞した。

平成7年

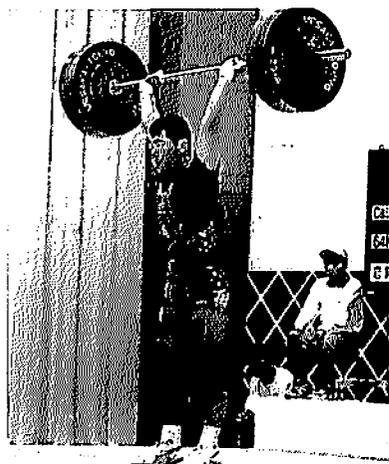
広島県で2回目の国体開催が来年に迫った。ウエイトリフティング開催地の東広島市では、会長に前垣壽男が就任して東広島市ウエイトリフティング協会が設立された。県協会副会長の田頭信夫や日吉秀樹、真野正、市協会会長前垣壽男、市実行委員会の富樫雅司らが中心となってリハーサル大会(全日本社会人・実業団・マスターズ・国体記念杯女子選手権大会)を東広島市運動公園体育館で開催した。リハーサル大会には、444名の選手が参加し、1つの体育館内に2つの競技会場を設営して行われた。県協会役員や地元実行委員会の懸命な頑張りと親切な対応で競技運営もスムーズに行われ、参加選手からの評判も良く、地元競技関係者にとって来年の国体開催に大きな自信となった。

このリハーサル大会に、広島県から14名の選手が出場し12名が入賞した。その中で、女子64kg級一般で2位に入賞した小川華奈子(ニッポー)の健闘が目立った。

国体少年の部では、真野正(県協会副会長)の指導を中学時代から受け順調に実力を付けてきた岩岡怜(海田)がS1位、J1位と大活躍した。岩岡怜(海田)は2年生であり、来年の広島国体での活躍が期待される選手である。全国高校総体では、+99kg級藤原盛登(府中東)が7位に入賞した。

〈現役員〉

会 長	日吉富美夫
副 会 長	桑田 悌二 田頭 信夫 日吉 秀樹 真野 正
理 事 長	熊本 忠弘
副理事長	池田 葆 大谷 隆昭 紀井 亮
理 事	江上 寛之 金只 章宏 河重 浩司 杉町 孝 多門 徹夫 中岡 公治 秀浦 忠弘 松井 雅和 村上 浩治 森島 武彦 門前 光一
監 事	小林 誠二 佐々木輝雄



広島国体少年の部64kg級岩岡怜のJ130kg

山口県

歴代会長

初代 夏川 和造 (昭和37年～)

第2代 下瀬 鉄蔵 (昭和51年～)

第3代 林 義郎 (昭和53年～)

事務局 〒759-66 山口県下関市富任町4-1-1 下関工業高等学校内
山崎 和幸 TEL 0832-58-0065

〈沿革〉

協会創立以前

終戦以前に姫田という方が重量挙げに親しんでおられ、終戦後の昭和22年、第一回国民体育大会から出場している、当協会の実質的な創始者ともいべき吉村浩氏に引き継がれて今日があるが、お陰で比較的に重量挙げの歴史は他県に比べて古い県ではある。

協会設立に至る経緯

山口県で高校生がウエイトリフティング競技を始めたのは昭和22年の第一回国民体育大会の年からで、吉村から指導を受けた、当時の下関工業高校生であった中村・松本の2名が昭和24年、福岡県開催の第3回国民体育大会に出場したことから山口県内の実質的な協会発足基盤のスタートとなった。

当初は下関工業高校と一部の社会人のみの競技人口であり、協会としては確立していなかったようで、多少の普及が進み、他の高校の参画が見られるまでは、下関工業高校の歴代校長先生と部長先生である倉本・寺本によって築かれて現在がある。

このように競技の歴史は他県に比べて古く、当初は数年間国体や高校選手権などで必ず数人の入賞者を出しており、国体でも当初は下関工業高校は2位や3位に入賞している。

そんな事で何と第2回全国高校重量挙げ選手権大会が、まだ部活動をしていない野球の名門校・市立下関商業高校の体育館で開催されているが、当時は他に適当な体育館が無かった為らしい。しかもマットも引かずに競技した為、体育館のステージが壊れた事を知る人は数少ない懐かしい後日談である。

昭和39年開催の第18回山口国体の時は県内で部活動している高校は、①下関工業高校、②下関西高校、③下関商業高校、④豊浦高校、⑤山口水産高校、⑥下関第一高校、⑦早稲高校などであ



下関市での昭和61年全国高校総合体育大会

り、社会人・大学生・高校生等選手層の充実をみるようになった。

高校からは明治大学への進学が特に多く、その他として中央大学・法政大学・日本体育大学などに進学して大いに活躍している。

大学の夏期合宿も下関で行なわれること6回を重ね、一緒に練習に加わる当地の高校生への刺激となって好結果をもたらしてくれた。

現在県内選手として活躍し、日本で記録に名を留めているは、明治大学在学中の中田朗生選手で、70kg級C&J 152.5kgのジュニア日本公認記録を保持しているが、現状は多少選手層に勢いが薄れており、総力を結集して選手の補強と強化が望まれるところである。

その為の第一歩は環境の整備であり、県・市・そして先輩方の絶大なる強力を望む次第である。

〈年次別概況〉

昭和22年

第1回国民体育大会(京都)、一般出場。

昭和23年

第2回国民体育大会(石川)、一般出場。

昭和24年

第3回国民体育大会(福岡)、一般・高校が揃って出場する。

昭和25年

第4回国民体育大会(東京)、総合3位に入賞する。

昭和26年

第5回国民体育大会(愛知)、総合3位に入賞する。

昭和28年

第7回国民体育大会(福島)、総合8位に入賞する。

昭和30年

第2回全国高校選手権大会(山口県下関市)が地元で開催され、下関工業高校が総合2位に入賞し、山口県内の普及が始まった。

昭和33年

第5回高校(秋田県秋田市)、下関工業高校総合3位に入賞する。

昭和34年

第13回国民体育大会(富山)、総合6位に入賞する。

昭和36年

第15回国民体育大会(熊本)、総合8位
に入賞する。

昭和38年

第10回高校総体(徳島県徳島市)、下関
工業高校総合3位に入賞する。

昭和39年

第18回国民体育大会(山口)、総合7位
に入賞する。

昭和46年

第25回国民体育大会(岩手)、総合6位
に入賞する。

昭和47年

第26回国民体育大会(和歌山)、総合5
位に入賞する。

第19回高校総体(福島県いわき市)、総
合2位に入賞する。これ以後総合入賞
はない。

昭和61年

第33回高校総体(山口県下関市)にて開

催するも、残念ながら入賞もできず現
在に至る。

〈現役員〉

会 長	林 義郎
副 会 長	寺本 繁次
理 事 長	夏川 清司
理 事	下瀬 輝隆
	徳田 博正
	野田 雅彦

徳島県

事務局 〒170 徳島県徳島市北矢三町2-1-1 県立徳島工業高等学校内
橋本 久 TEL 0886-31-4165

〈沿革〉

昭和21年

4月2日、徳島市において重量拳講習会が開催される。主催は徳島新聞社、講師は京都協会会長谷本昌平氏(京都新聞社工務局長)、受講者は藤原八郎1人、その直後から藤原宅(山川町)の牛小屋を改造して練習を開始する。バーベルは谷本氏より借用、第五郎、昭、住友恒一、大石仁、藤森昇もこれに参加、高越クラブが発足。

第1回国体に藤原八郎が出場、M級3位に入賞、この時、谷本氏宅で初めて井口幸男氏と会う。

一方藤原が勤務する徳島工高においても練習場を作り、生徒の河野正一、工藤健一、奥村弘安、大西弘その他計8名が練習を開始する。各物資の極端な不足時代であったが学校でバーベルの製作を始める。藤原が機械科の教員であり、専門が鍛造、鍛造、熱処理、教材試験であったのが幸いしてこの作業は以降15年間も続く。後期には全国大会に使用した審判判定器も3種類作り上げる。このバーベルを製作したことが、重量拳を徳島県に定着、普及させた要因の一つと考えられる。

昭和22年

藤原五郎、昭に谷本直次その他が加わり国鉄クラブを結成、これにも自作のバーベルを配置する。金沢市で第2回国体が開かれ、藤原八郎がM級で優勝する。徳島工高で重量学部として承認され、練習も熱を帯びてくる。

昭和23年

第3回国体が戸畑で開催され、M級藤原八郎優勝、徳島県体育祭の西の丸グラウンドで重量拳の公開演技を行う。穴吹高校の吉田広一が練習を希望し、以降徳島工高で練習することになる。国体も米年の東京大会から団体成績の競技となるのが決定される。奥村弘安の勤務する東邦レーヨンにクラブが誕生する。メンバーは戎義和、藍川勝

市、佐藤光男その他、このクラブにもバーベルを配置する。

〈年次別概況〉

昭和24年

競技人口も増加し、今年の国体から府県対抗の国体成績でも競うためにフルエントリーで参加する必要があり、当然県選手権大会も国体予選を兼ねて実施しなければならない。また、統轄する県協会も設立を急がねばならない。2月中旬より実施要項案、協会規約案を作り検討を始める。3月末谷本昌平が京都新聞社より徳島新聞社工務局長として着任される。

4月1日、徳島県重量拳協会発足する。会長・谷本昌平、理事長・藤原八郎、理事・奥村弘安他5名。県体育協会へ加盟。9月23日、第1回県選手権大会兼国体予選会を徳島工高で開催して、国体県代表選手を決定する。F級藤原五郎(高越ク)、B級谷本直次(徳鉄ク)、Fe級山本好市(徳新ク)、L級住友恒市(高越ク)、M級藤原八郎(高越ク)。第4回国体が東京で開催され谷本5位、藤原八郎優勝。

11月、穴吹高校に重量拳部が誕生し、同時に社会人の穴吹クラブも発足する。バーベル2セットを設置する。

昭和25年

名古屋で第5回国体が開催される。この大会からLH級が新設される。F級藤原五郎、M級藤原八郎、LH級吉田広一の3選手が優勝、谷本直次も4位に入賞、徳島県が団体優勝する。

8月15日、第1回県高校選手権大会が徳島工高で開催され徳島工が優勝、以来36年連続して団体優勝を続ける。鳴門商高で練習を始める。

昭和26年

第6回国体は広島県三原市で行われM級藤原八郎、LH級吉田広一が優勝、F級藤原五郎、Fe級東條正一が2位、B級藤原昭4位、L級奥村弘安5位と全員が入賞、団体連続優勝をする。

歴代会長

初代 谷本 昌平 (昭和24年～)

第2代 山本 正雄 (昭和28年～)

第3代 島内嘉喜太 (昭和37年～)

第4代 河野 康一 (昭和39年～)

第5代 楠 才之丈 (昭和60年～)

10月、初めての国際競技として日米対抗競技大会が東京、京都、新居浜の3ヶ所で開催される。藤原八郎は日本代表として約2週間米チームと帯同してこれに出場する、新居浜大会には本県からB級藤原五郎と藤原昭、LH級吉田広一の3名も出場。

アメリカチームは殆んど日系2世と3世であるが、彼達はオリンピック、世界選手権出場の経験を持ち全米選手権保持者もいて、すばらしいメンバーであり、技術的に学ぶところが多く貴重な体験であった。

この年、藤原八郎は日本協会の理事となり、上京する機会が多くなった。県協会谷本昌平会長が愛媛新聞社工務局長へ転出せられ、会長が空席となる。

昭和27年

3月、ハワイのホノルルで第2回の日米対抗競技会が開催され、日本代表として飯田勝康(東京)、白石勇(愛媛)、井口幸男(東京)、藤原八郎(徳島)の4選手が出場した。到着3日目に第1戦が催されたが、10日間の船旅で練習不足の日本チームは調整に苦しむ。第2戦以降に備えてコンディション作りを始める。藤原はヌアヌYMCAのジムに通って練習。同時に強化トレーニング法の研修を1ヶ月余にわたり続ける。ハワイ側の都合で第2戦以降は行われず帰国する。古書店で重量拳関係の雑誌、書籍を大量に買い入れて持帰る。第7回国体は福島県平市で開催され、M級藤原、LH級吉田が連勝、F級藤原、Fe級東條3位に入賞するが団体は2位となる。

この国体開催中に全国理事会も開かれ、激論の末、学連の設立が承認された。この席上、藤原八郎らは高体連への加盟と全国大会の開催を強く要望するが、この問題は来年以降に先送りとなる。阿地暹海(福島)、押野春次(大阪)、小川準三(秋田)の先生方が最も熱心に推進派であった。

昭和28年

国体を兼ねて行ってきた全日本選手権大会が分離して開催され、その第13回大会が大阪で実施、M級藤原、LH級吉田が優勝、藤原は7連勝、吉田は4連勝を飾る。第8回国体新居浜市で開催、F級藤原、LH級吉田の3位のみで不振。12月のアジア大会予選にM級藤原八郎、LH級吉田広一が優勝し、代表に決定。予選会場は福島県平市。

昭和29年

マニラ市の第2回アジア競技大会でM級藤原八郎第3位、LH級吉田広一第5位に入賞。小樽市の第9回国体は交通事情により始めてブロック予選を実施。本県は4階級に出場権を得る。国体ではF級藤原五郎3位、B級藤原昭第2位、M級藤原八郎、LH級吉田広一が優勝、団体2位。

徳島市において第1回全国高校選手権大会を開催する。第14回全日本選手権大会も併行して同時開催。高校ではFe級武岡充(穴吹)が優勝、M級岸野克巳(徳島工)が2位。全日本では吉田広一がLH級で5連勝。藤原八郎理事長大会残務処理の為選手を引退。以降指導に専念する。(以来徳島県で第10回徳島、第18回鳴島、第36回上板と全国高校総体を4度開催する)

昭和30年

第2回全国高校選手権大会でB級山崎弘(徳工)が優勝、第10回国体でB級藤原昭3位、全日本でLH級吉田広一6連勝。

昭和31年

兵庫国体で団体7位。

昭和32年

始めて世界選手権大会に県選手を送る。L級山崎弘(徳工-明大)イラン、テヘラン大会に出場する。

昭和33年

第5回全国高校選手権大会でM級継岡正章(徳工)が優勝、第13回国体でL級山崎弘第2位に入る。総合成績で5位。

昭和34年

第14回国体は東京で開催、本県代表のL級山崎弘が2位、LH級継岡正章が3位に入賞、団体成績は5位。L級の山崎はJ種目で当時エジプトのシャムス選手の持つ155.0kgの世界記録を157.5kg、160.0kgと2度にわたって破り、日本人初の世界新記録を樹立する。この時の主審は隅然藤原理事長で、当時の感激は今でも忘れない。団体成績は、第3位。

昭和35年

国体少年の部が創設、近畿四国のプロ

ック2チーム出場可能となる。徳島県チームは以後全部の回に出場、第15回国体宇土市で総合第2位。L級山崎弘、MH級林義弘2位、継岡正章LH級で優勝、以後継岡は国体に12連勝する。少年ではFe級波連久雄第2位、F級木村忠雄第3位に入る。

第17回ローマ・オリンピックにL級山崎弘(徳工-明大)Fe級藤原善信(穴吹-日大)が日本代表で出場。

昭和36年

波連久雄は(穴吹)第8回全国高校総体でL級優勝、県内高校選手大会参加が13校となる。第16回国体(秋田)で少年Fe級松島靖夫2位、B級木村忠雄、L級波連久雄3位、一般で継岡優勝、山崎M級で2位、B級梶浦孝之、Fe級藤島3位、総合成績で第3位となる。ウィーンの世界選手権大会に山崎が日本代表で出場。林義弘(徳工-明大)は主将として全日本大学対抗戦に6連勝する。

昭和37年

岡山国体でM級山崎弘とMH級継岡正章が優勝、第4回アジア競技大会に山崎弘、継岡正章日本代表となる。

昭和38年

山口国体で継岡連勝、少年B級で井筒正博(徳工)3位に入る。

徳島市で第10回全国高校総合体育大会を開催、12月第3代会長島内逝去。

ストックホルムの世界選手権に山崎弘(L級)日本代表となる。東京国際スポーツ大会でMH級継岡正章が優勝。

昭和39年

第11回全国高校総体(土岐市)で徳島工が団体準優勝。新潟国体で少年L級武知俊治(徳工)第2位、F級三木功司(徳工)M級増井優3位に入賞する。

東京で第18回オリンピック競技大会開催、L級山崎弘(主将)出場して6位に入賞する。

昭和40年

岐阜国体で少年B級古庄紀治(徳工)第3位、H級継岡正章優勝、同選手LH、MH、H3階級

の日本記録全部12ヶを保持する。東京オリンピック記念事業として徳島県挙拳センターを徳島市城の内町に建設する。敷地は市有地を無償で借り建設費は県協会負担、公式競技用と社会人、高校生の練習用を兼ねる。以来15年間活用され全国的に注目される。

昭和41年

第5回アジア競技大会(バンコク)に継岡正章出場しMH級で2位に入賞する。

昭和42年

埼玉国体で三木功司(徳工-中大)B級Sで115.0kgの世界新記録を樹立。

昭和43年

第23回福井国体少年にF級で端谷武三(徳工)3位に入る。

昭和44年

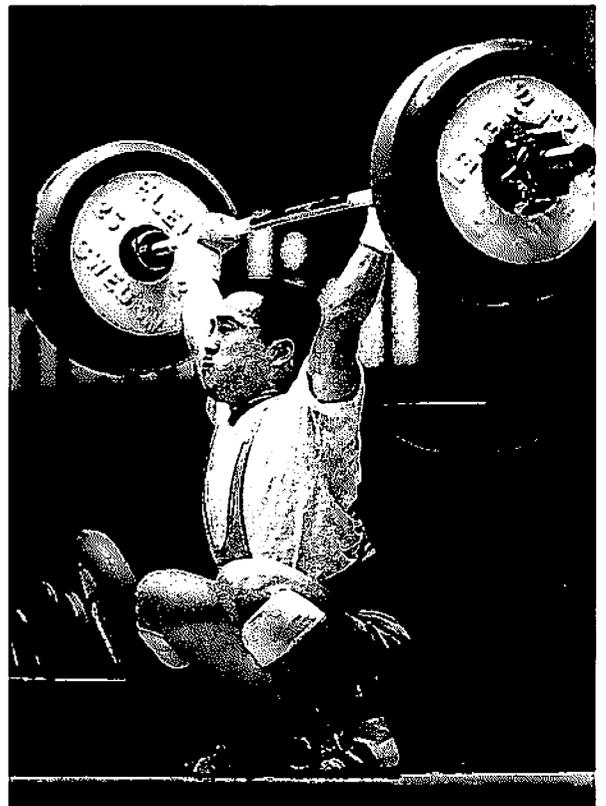
藤原理事長が監督してポーランドの第23回世界選手権大会へ参加、日本チームは優勝者2、3位1、5位1、6位2、8位1で団体3位の過去最高の成績を収める。藤原は国際審判員の資格を取得し、帰路行われたチェコとハンガリーの国際競技に主審を勤める。

昭和45年

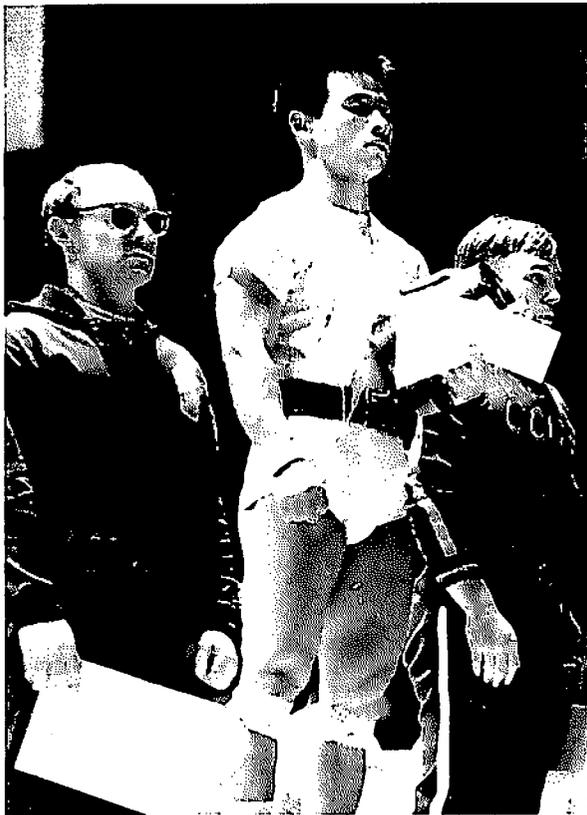
第25回の岩手国体でB級細谷治朗(富岡東-日体大)が2位に入る。

昭和46年

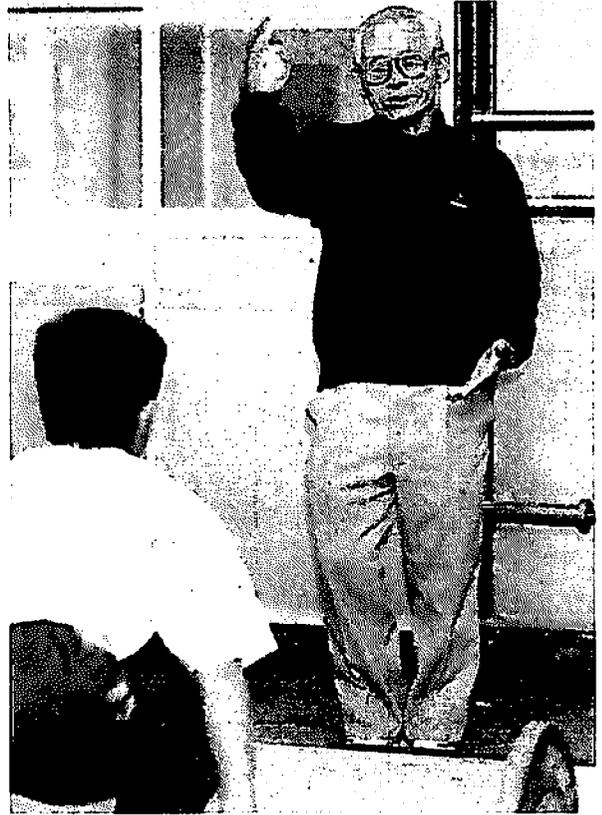
第18回全国高校総体を本県の鳴島町で開催する。徳島県として3度目の開催である。第26回国体で細谷治朗(富岡東-日体大)はB級で第1位となる。



世界選手権B級Sで世界新記録を樹立した三木功司(昭和46年)



世界選手権大会日超優勝の細谷治朗(昭和52年)



中学生を指導する藤原理事長

同選手はリマの世界選手権大会B級6位に入賞。

昭和47年

第20回オリンピック競技大会(ミュンヘン)に果人3人目として三木功司がB級に出場、Sで世界新記録を樹立する。

昭和48年

ハバナの世界選手権大会B級に出場した三木功司(徳工-中大)はSで117.5kgの世界新記録を出し、3位に入賞。

昭和49年

世界選手権大会(マニラ)B級に出場した細谷治朗は3位入賞を果たし、昨年の三木に引続き果人の気を吐く。

昭和50年

三重国体でH級西本研一(徳大医学部)が3位に入る。

昭和51年

佐賀国体で少年B級原塚博文(徳工)が優勝する。第21回モントリーオール・オリンピック競技大会の日本代表に細谷治朗が選ばれる。果人として4人目。

昭和52年

青森国体で+110kg級に出場した西本研一が優勝。ドイツのシュツトガルトで行われた世界選手権大会56kg級に出場した細谷治朗はT257.5kgで優勝し、日本人として4人目のチャンピオンとなる。これは徳島重量学界初の快挙である。三木功司が国体60kg級で優勝。

昭和53年

第33回の長野国体で+110kg級の西本研一が2連勝する。

昭和54年

世界選手権大会(サロニカ)に細谷治朗は56kg級4度目の出場をする。宮崎国体で西本研一が+110kg級で3連勝。過去15年間、県重量学界の競技と練習の中心であった重量拳センターが隣接の県体協研修館、市民会館(第1回と第10回の全国高校総体の会場)と共に、公園法の改正により撤去されることになる。デンマークのカストラップ国際大会に古庄輝亘(徳工-明大-藍染自営)監督、100kg級林俊治(徳工-中大-明治乳業徳島)、+110kg級西本研一(徳島大医学部-同付属病院)の果人チームを送り出す。

昭和55年

徳島工高に公式競技可能な200㎡の練習場(鉄骨)が県教委により新築される。鳴門工高に重量拳部が誕生。同校創立20周年記念事業の一つで練習場が建設される。県協会よりプラットフォーム1面とバーベル1セットを贈る。

昭和58年

藤原理事長が日中友好大会出場の日本チーム団長を勤める。福田弘監督、コーチは三木功司、細谷治朗。杭州、上海で競技する。成績は引分けとなる。

昭和60年

県協会発足以来47年間、理事長を勤めた藤原八郎が定年退職により副会長に昇格、新理事長に可原健司が就任。

7月、河野康一会長が辞任され、第5代日会長に楠才之丈が就任する。シオス社長の楠垣男副会長の1人に委嘱する。

県高体連より昭和64年の全国高校総体県内開催種目にウエイトリフティングが決定の通知が来る。4度目の開催である。会場は上板町に決定。

昭和61年

第48回東四国国体開催決定、藤原県体協競技力向上委員会副委員長となる。徳島市中学の重量拳教室を開設し藤原が指導に専念する。

昭和62年

国体開催地が藍住町に決定。直ちに同町にも中学生の重量拳教室を開き、主として藍住中学の生徒を対象にして指導を開始。高校に強化指定校を決定し、重点的指導を始める(徳工、鳴工、板野高の3校)。

昭和63年

京都国体2巡目に入る。藤原、日体協より表彰される。第24回オリンピック競技大会がソウルで開催、細谷は日本チームのコーチとして指導に当たる。

平成元年

板野郡上板町で第36回全国高校総体が開催される。当初競技場が2階であり

且、狭いのを心配するが、開会式から閉会式まで観衆が超満員と冷房装置が使えたことで参加者には好評であった。北海道国体で少年60kg級の富永佳孝(鳴門工)がSで優勝する。

山形県羽黒町で行われた全国中学生大会に初めて藍住中から参加し、入賞者3名。以後連続して参加する。

平成2年

北京のアジア大会に細谷治朗が監督、三木功司はコーチをつとめる。県人の活躍がつづく。

この年から県内公式競技会を藍住町で行い、町民に観てもらおうよう努める。

平成3年

第5回全国中学大会を藍住町で開催する。会場は同町勤労者体育館、観衆も多く盛会裡に終了する。

平成4年

新築した町民体育館と藍住中学体育館の2会場で国体のリハーサル大会を開催する。種別も全日本社会人、実業団対抗、マスターズ、全日本女子を実施、多忙を極める。

第47回山形国体で少年75kg級増井敬治(徳工)が2種目に優勝する、同選手は選抜、総体、国体とパーフェクトを実現。県協会理事長を古庄紀治に交替する。競技力向上事業も順調に消化する。

平成5年

本年度、大改正された新体重級別による最初の国体として第48回東四国国体が藍住町で開催。

第1日目の少年54kg級Sで、宮川一宏(鳴門工)が95kgに成功して種別優勝。他の6選手も健闘し県選手団の目標である「全員入賞」を達成、団体成績7位に入賞。

この藍住国体で選手宿舎について一つ

のアイデアが実行された。会場至近の場所に選手村を作り、参加全選手の宿泊に提供したのである。これはアンケートでも非常に好評を得たが、国体史上初めての試みでもあった。

藍住中学にウエイトリフティング部が創立され、その練習場は4面の小型のプラットフォームが使用されている。同じ頃、町民体育館内にも社会人用の練習場ができる。

平成6年

準備してきた国体開催記念事業に取りかかる。以前立退きのため取り壊した重量挙げセンターの復活を県協会の記念事業としたのである。その建設には資金、用地に課題があり、開催決定の際に立案された10年計画のものであった。建設条件として、①将来立退き問題が起らない、②音響、振動が近隣に影響しない、③24時間何時でも使用できる。

④使用料は無料、⑤指導者がそこにいること(指導者の所有敷地内)、⑥かなりの駐車スペースがあること、等を基本条件とした。それを充たして徳島市南佐古町に先ず1棟が完成し、つづいて翌7年度に麻植郡山川町でも1棟の計2ヶ所で完工をみたのである。

この両施設は現在活用中である。

平成7年

徳島県で第50回国体が開催され、その総合開会式場で藤原八郎県副会長が国体連続50回参加の特別表彰を受け、記念に金時計を頂戴する。

いわき市の会場では少年99kg級山下宗晃(板野高、県選手団旗手)が優勝した他、全員2種目入賞の目標を達成し総合第6位に入る。

平成8年

神奈川県真鶴町で開催された第10回全

国中学大会に出場した藍住中学、八万中学から優勝3名、2位3名の計6名が上位入賞したのは画期的なでき事であった。又山川練習場で地道な練習を繰返して来た畑中正博選手がマスターズ優勝、社会人大会での富永佳孝が2位、女子大会で板野高晃昇留美が3位入賞と県内普及が拡大してきている。県協会も創立50年が間近となり、記念事業として、県協会50年史の刊行を企画し、その準備に入っている。

本稿での年次別概況は至って簡略なものであったが、50年史において充実した内容にと願っている。

最後に本県関係者が非常に心強く感じているのは県出身の藤岡正章、三木功司、細谷治朗3君の中央での活躍である。

〈現役員〉

会 長	楠 才之文		
副 会 長	藤原 八郎	楠 恒男	
理 事 長	古庄 紀治		
副理事長	藍川 勝市		
理 事	波速 久雄	川辺 圭良	
	古庄 岩吉	本田 健治	
	後藤康治郎	福田 嘉文	
	清水 英二	橋本 久	
	若林万寿雄	三木 康裕	
	瀬部 浩司	村上 浩一	
	増井 優	林 俊治	
	鎌田 幸義	天野 健一	
	大正谷 稔	可原 健司	
	奥角 俊雄	小林 雅嗣	
	河野 長男	畑中 正博	
	酒井 光一	河野 浩仁	
	至極 昌英	渡辺 正	

香川県

事務局 〒764 香川県仲多度郡多度津町栄町1-1 香川県立多度津工業高等学校内
川平健三郎 TEL 0877-23-5248

歴代会長

初代 鎌田 道海 (昭和41年～)

第2代 鎌田 守恭 (平成3年～)

<沿革>

協会創立以前

昭和38年頃からウエイトリフティング協会設立の声があったが、ウエイトリフティング競技に対する知識も乏しく練習施設、指導者もなく同好会のような集りであった。

その頃は、ウエイトリフティングに興味のある者が集まり、個々に練習をしていた。

高松市内では監督の家の車庫を改造して造田道場をつくり合同練習を始め、西讃の丸亀市では田川道路で練習をした。

当時は、ウエイトリフティングを志す素質のある学生もいたが、香川県には協会がないため、公式の大会、国民体育大会への参加はできないのが現状であった。

しかし、ウエイトリフティング競技にかける情熱は非常に強いものがあつた。

協会設立に至る経緯

昭和40年に入り協会設立の声が次第に大きくなってきたが、いろいろ困難な問題があり、日本ウエイトリフティング協会に相談したところ、徳島県立徳島工業高校学校教諭の藤原八郎先生を紹介され、ご指導を仰ぐことになった。

藤原八郎先生にはご多用のなか何度か高松までおいでいただき、ウエイトリフティングについて初歩からの講習会、審判講習会を開き、選手や審判員の養成のご指導をいただいた。

幸い施設、器具などは日本秤錘株式会社提供してもらい、公的には高松市立栗林小学校体育館に於いて、香川県ウエイトリフティング普及指導講習会を開くなどして、鎌田道海に会長就任を依頼し、正式に、「香川県ウエイトリフティング協会」設立にこぎつけた。

他県と異なり高等学校には練習場もなく、指導者もウエイトリフティング部もなく、文字通り手づくりではあったが、希望に燃えた香川県ウエイトリフティング協会の発足となった。協会設立以前から、故鎌田道海会長、野崎義也副会長には陰に陽に物心両面にわたり暖かいご支援をいただいた。

<年次別概況>

昭和40年

藤原八郎先生を迎えて日本秤錘株式会社においてウエイトリフティング競技普及、審判講習会を開催をする。

昭和41年

4月、「香川県ウエイトリフティング協会」を設立。

5月、協会主催第1回県レベル競技会を実施する(場所・日本秤錘株式会社講堂、参加選手23名)。

昭和49年

造田恒男監督が自宅車庫を開放し造田道場をオープン、高松での合同練習を始める。

昭和52年

このころまで、西讃地区では高松の造田道場と同様個人宅を開放していただいた田川道場で杉嶋利洋理事が指導し、興味のある者が練習をしていたが、丸亀市立体育館の新設にともない、館内にウエイトリフティングの部室を確保して、丸亀市の委託を受け小田一志監督を指導者として本格的に練習を始めた。

ウエイトリフティング競技はマイナーであり、選手の確保に苦勞するなど軌道に乗せるまでは関係者のなみなならぬ熱意と努力が求められた。しかし、特に高校生の指導、育成に力を注ぎ、数年を経ずして数多くの国体選手を育成するなど、目覚ましい成果をあげていった。

この当時、県内大会、四国大会は会長鎌田道海が経営する日本秤錘株式会社の講堂で社員の協力も得て開催し、香

川県ウエイトリフティングの基盤をつくっていった。

昭和62年

平成5年の東四国国体を射程に入れ、競技団体と県が一体となり指導者の確保、選手の育成にとり組みはじめた。

昭和63年

日本体育協会の第4回理事会において、第48回国民体育夏・秋季大会を香川・徳島両県で開催することが内定。これを受けて県レベルでの強化計画が実行に移され、県立多度津工業高等学校、県立香川中央高等学校、県立丸亀高等学校の3校が高等学校ウエイトリフティング強化指定校に指定した。

この年、県立多度津工業高等学校にウエイトリフティング同好会が発足し、小田一志理事が指導して全国高校総体と全国高等学校選抜大会に初めて選手を派遣した。

平成元年

強化指定を受けた県立多度津工業高等学校にウエイトリフティングの専用練習場が完成し、指導者として日本体育大学出身の川平健三郎が赴任、同好会を部に昇格させ高校生の本格的活動を始めた。

平成2年

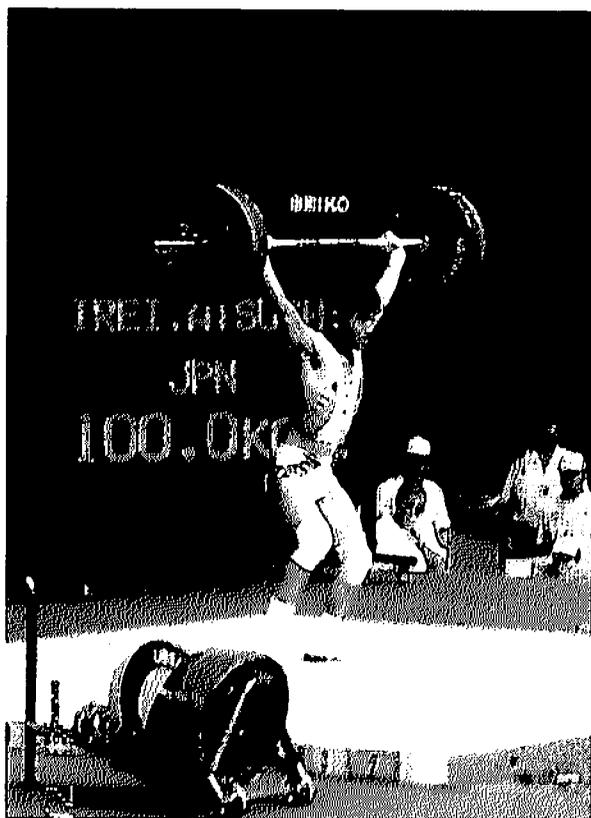
日本体育協会の理事会において第48回国民体育大会夏・秋季の開催地として香川・徳島両県が正式に決定された。この年、県立丸亀高等学校に日本体育大学出身の花城正樹が指導者、選手として採用され、県立多度津工業高等学校と併せ高等学校での活動が軌道に乗ってきた。

平成3年

財団法人香川県スポーツ振興財団に52kg級、伊禮淳を招いた。

県立香川中央高等学校にウエイトリフティング専用練習場が完成した。オープン披露には、伊禮淳が花城正樹の解説で模範演技を行った。

伊禮淳は後にバルセロナ・オリンピックに出場。



バルセロナ・オリンピックに出場した伊禮淳(平成4年)

これを機に同校にウエイトリフティング部を設立、部員3名で発足し、伊禮淳が指導にあたることになった。

高知市において開催された四国高等学校総合体育大会、第2回四国高等学校ウエイトリフティング選手権大会で初めて県立多度津工業高等学校が総合優勝した。

鎌田道海会長が逝去され、後任にご子息の鎌田守恭が就任。

平成4年

全国高等学校選抜大会において、56kg級島裕也(県立多度津工業高等学校)が2位に入賞し、香川県から初の高校生の全国入賞となった。

県立香川中央高等学校に、日本大学出身で大学選手権優勝の奈良輝揚仁を指導者兼選手として迎え、強化指定校3校のトレーニング活動が国体に向けて本格化した。

全国高校総体において75kg級藤田昌士、90kg級安藤優聡(県立多度津工業高等学校)が共に2位に入賞、個人・団体初の入賞となった。安藤はこの年の国体で5位に入賞を果たした。

伊禮淳、バルセロナ・オリンピック52kg級へ出場し、9位の成績を取めた。本人としては不本意な結果であったが、国際レベル選手育成は協会設立以来の念願でもあり、このオリンピック参加が各選手の士気を高めたことは言うま

でもない。

平成5年

東四国国民体育大会が10月24日～29日間開催する。

40年ぶりの東四国国体の開幕。改めて国体開催の意義、競技団体として責任を痛感する。

東四国国体を目標に今まで積み重ねたノウハウを開花させるべく、関係者一丸となり取組んだ。

2県開催でのプレッシャーのなかでよく健闘した選手に対し大きな拍手を送りたい。

この大会で得た貴重な体験は永く若い指導者、選手に受けつがれ、将来に向け一層の飛躍

を目指し、発展させる基礎ができた。この大会を見ることなく平成3年、4年と相ついでご逝去された鎌田道海会長、野崎義也副会長に感謝を申しあげたい。

平成7年

尾崎龍太(県立多度津工業高等学校)が全国高等学校総合体育大会において、+99kg級で2位に入賞した。

この年、韓国で開かれた第17回日韓ユース大会に日本代表として出場した。

第50回福島国体において少年・成年7名エントリー選手全員がはじめて得点対象となった。

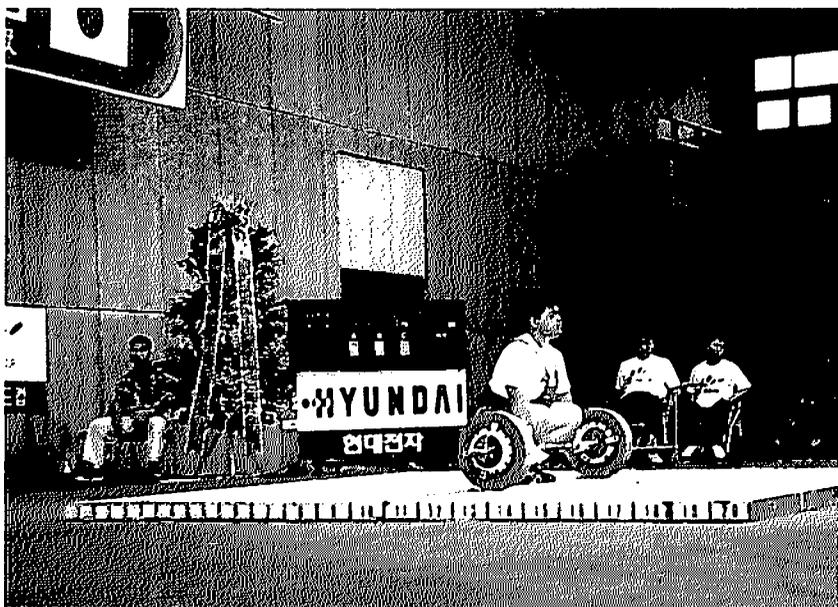
第6回四国高等学校ウエイトリフティング競技選手権大会において、学校対抗で県立多度津工業高等学校が連続5度目の優勝。

平成8年度までにお世話になった監督は以下の通り。はじめはウエイトリフティングに対する知識が少なかったために、監督の人選も難航していたが、年を経るにしたがい選手の中から指導者も育ち、この人達が協会の伝統づくりに貢献してくれた。

成年監督	少年監督
田面広一郎	高橋 幸雄
造田 恒男	津山 助一
杉嶋 利洋	砂留 修司
小田 一志	川平健三郎
大野 順平	
朝国 誠二	
花城 正樹	

〈現役員〉

会 長	鎌田 守恭
副 会 長	山内 俊夫 小田 一志
	中北 斎
理 事 長	濱岡 徹
理 事	松村 功久 大野 順平
	津山 助一 川平健三郎
	花城 正樹 山花 一夫
	杉嶋 利洋 奈良輝揚仁



日韓ユース大会、香川県より初出場の尾崎龍太(平成7年)

愛媛県

事務局 〒792 愛媛県新居浜市一宮町1-9-20 新居浜市農協金子支所内
小野 正 TEL 0897-36-3133

〈沿革〉

協会創立以前

第2次大戦後混乱時の昭和21年、当時戦後復活した日本重量挙協会会長(新居浜市出身、国会議員)の小西英雄がアメリカ視察の一環としてバーベルを持ってきたのがはじまりで、当時認識の薄かった新居浜の関係者も「トロッコの車論じゃないか」といったような話もあった。

このバーベルにより最初に選手としてスタートしたのが、当時小西の秘書で前協会副会長の清村義明で、日マトレニングにはげみ、昭和23年第3回国民体育大会に初出場したのが本県選手の第1号であった。

清村は、第4回国体M級で6位(217.5kg)に初入賞した。

その後工場地帯の新居浜を中心として同好者が増え、専用道路も山尾石炭横に設けた。清村について黒川晋(新居浜物産三前会長)、白石勇(住友化学)らが中心となり、本格的な組織化がはじまった。

協会創立に至る経緯

本県の場合、競技の普及は社会体育を中心として発展し、昭和26年に新居浜西高に部活動が開始され、学校体育にも導入された。

昭和26年10月、新居浜地方祭には当時世界のトップレベルにあった米岡から5人の強豪選手を招き、祭場の一宮神社で大観衆の前で紹介され、太鼓台見物に集まっていた市民より喝采をあげた。

日米交歓重量挙第4戦は10月20日、新居浜市公会堂を会場として行われ、記録は次の通りであった。

B級

- 1位 藤原 昭(徳島)230kg
- 2位 藤原 五郎(徳島)222.5kg

Fe級

- 1位 リチャード富田(米国)292.5kg

- 2位 丸井太一郎(兵庫)275kg

L級

- 1位 ジョージ吉岡(米国)292.5kg

- 2位 清村 義明(愛媛)265kg

M級

- 1位 エメリック石川(米国)305kg

- 2位 藤原 八郎(徳島)292.5kg

LH級

- 1位 キヨユキ山下(米国)300kg

- 2位 吉田 広一(徳島)285kg

昭和26年第6回国体(広島)B級に出場した白石勇が初優勝し、2位・3位各1名、6位1名の好成績を収め、白石は第6回愛媛大会功労賞を受賞した。27年度協会組織化の環境が整い、昭和27年4月に谷本昌平を会長として愛媛県重量挙協会が発足した。

〈年次別概況〉

昭和27年

2月21日、白石勇がハワイ遠征日本代表に選ばれ、日米親善につくした。

5月25日、ヘルシンキ・オリンピック代表選考会(東京)が行われ、白石勇が当時の日本新記録で優勝(275kg)しオリンピック出場権を獲得、日本の重量挙界初のオリンピック選手となった。

7月19日には単身ヘルシンキに遠征した白石勇は、監督もコーチもおらず減量に苦しみ、残念ながら試合の途中で棄権。

第7回国体(平市)には2名が入賞し、Pで黒川晋が日本新を樹立した。学校体育では、新居浜西高から独立した新居浜工業高にも部が開設。

昭和28年

この年は第8回国民体育大会が四国四県で開催され、当競技は新居浜市立宮西小学校を会場に10月23日~26日まで行われた。日夜猛練習に励んだ本県選手団は、Fe級白石勇、L級清村義明が優勝し、2位2名、4位1名、6位1名と全員入賞を果たし、団体でも初優勝した。

昭和29年

歴代会長

- 初代 谷本 昌平(昭和27年~)
- 第2代 宮脇 先(昭和34年~)
- 第3代 村上信二郎(昭和44年~)
- 第4代 森 清(昭和48年~)
- 第5代 黒川 晋(昭和63年~)
- 第6代 都築 清(平成6年~)

10月16日全日本選手権(徳島市)ではF級松垣大、M級黒川晋が優勝し、初出場の加藤忠吉はFe級3位に入賞。翌日の第1回全国高校選手権大会B級では明星敬二(新居浜西高)が260kgの記録で優勝。

第9回国民体育大会(小樽)でFe級白石勇が日本新を樹立し団体は5位。

昭和30年

全日本選手権(滑川市)では、F級松垣大、M級黒川晋が優勝、その他B級3位、Fe級5位に入賞。

第10回国体(川崎市)F級松垣大優勝、Fe級3位、L級4位、団体5位。

昭和31年

第11回国体(尼崎市)F級2位、L級4位、国体5位であった。全日本選手権はFe級5位に入賞。

昭和32年

全日本選手権(東京)でLH級黒川晋が通算3度目の優勝、他にL級2位1人。第12回国体(清水市)M級2位、MH級3位、Fe級6位、団体5位。

黒川晋が読売新聞社日本スポーツ賞、日本WL協会最優秀選手賞を各々受賞。

昭和33年

第5回全国高校選手権大会(秋田市)ではB級2位に元山寛男が入賞。

第33回国体(滑川市)ではM級で加藤忠吉が初優勝、LH級3位、F級4位、団体4位に入賞。

この年から県内大会で一般と高校に分離して開催することになった。高校Fe級に優勝した今井義明(新居浜西高)が新居浜市制20周年事業を飾る市民像のモデルとなり、翌年の昭和34年5月17日新居浜駅前で除幕された。このブロンズ像はその後開催された新居浜市民体育祭のメダルや賞状のバックデザインとして市民に親しまれる。

昭和34年

この年の全日本選手権大会は6月13日~14日新居浜市公会堂で行われ、B級松垣大、M級加藤忠吉、LH級黒川晋の3名が2位、Fe級5位、L級6位に

入賞。

第14回国体(東京)ではM級、LH級各々に2位、L級5位、団体6位であった。

昭和35年

全日本選手権(秋田)M級3位、第15回国体では加藤忠吉がM級で2度目の優勝、団体はこの年から一般と高校に分離されたが、総合6位となる。

昭和36年

5月に黒川晋が文部大臣スポーツ功労賞を受賞。6月には全国で初めての新居浜市重量拳道場が完成し、三宅義信、古山征男、桂川孝三の3選手を招き道場開きを行った。この練習場は、本県選手のみでなく、その後全日本や各大学の合宿等にも利用されている。

全日本選手権(新潟黒崎村)でM級加藤忠吉が初優勝。他にL級に3、4位に入賞。

第16回国体(秋田)LH級・MH級3位、M級に4位に入賞したが、昭和27年以來10年間続いた団体入賞を残念ながら果たせなかった。

昭和37年

第9回全国高校総体(宇都宮)では、ひさしく入賞がなかったがFe級3位に谷村守が入賞し、9月の国体四国近畿予選会で本県高校初の出場権を獲得し、第17回国体(岡山)ではB級、Fe級4位、LH級6位、一般ではM級3位となった。

昭和38年

この年から始まった第1回全日本社会人選手大会にはM級、MH級に2名が初参加。

昭和39年

全日本選手権(江刺市)LH級で4位に入賞。

昭和40年

松山市の松山聖陵高校に部が開設され、新居浜から県都への広がりができた。第2回全日本社会人にはM級で2位に入賞。

昭和41年

第3回全日本社会人(高萩市)において、LH級3位、MH級4位、5位に入賞。

昭和42年

第22回国体においてM級4位に入賞した。

昭和43年

進学した大学生が活躍し、全日本大学新人戦L級6位、全日本学生選手権ではFe級6位に入賞。

第5回全日本社会人ではMH級5位。

昭和44年

この年は高校生に向上がみられ、国体四国地区予選で優勝し7年ぶり2度目

の国体出場権を得た。

第24回国体では、高校F級5位に入賞。第6回全日本社会人(大宮市)ではH級に森金男が初優勝。

11月、新会長に村上信二郎を迎えた。

昭和45年

競技生活20余年と当時の日本最長記録を持っていた黒川晋が選手生活から引退。最後の競技会は第25回国体(江刺市)であり、NHKで「最後のバーベル」の番組が国体出場を中心に制作され全国に放送。国体に出場すること20回、この間2位4回、3位6回、6位内2回の入賞を果たし、全日本選手権では優勝4回、2位1回、全日本社会人では2位4位に各1回入賞し、この間日本記録の更新も数回にわたり、最高記録はJの152.5kgである。この結果日本WL協会から初めての功労選手賞を受賞。

全国高校総体(串本市)ではFe級7位、第25回国体では高校の部2年連続3回目の出場権を獲得し、Fe級で3位に入賞。

昭和46年

3月14日新居浜工業高校体育館を会場に前年引退した黒川晋の引退記念大会を行い、三宅義行、大内仁、大沼賢治、中尾美喜夫と早稲田大学の選手を招き、早大-愛媛対抗の記念競技会を行った。第26回国体では高校の部が3年連続4回目の出場。F級、Fe級各々5位に入賞した。全日本大学新人戦ではM級2位に入賞。

四国では全国高校総体が開催され、同選抜は鴨島町で行われた。

昭和47年

村上信二郎に代り森清が会長に就任。全国高校総体では、M級で2年生の小野正が3位に入賞した。国体地区予選では、残念ながら徳島県に敗れた。全日本大学新人戦でFe級6位に入賞。

昭和48年

全国高校総体(亀山)M級で小野正が初優勝、他にL級6位、MH級7位、学校対抗で8位に初入賞。

第28回国体では、M級小野正が高校総体に続いて優勝、L級3位、B級5位、Fe級7位、果別得点7位。

昭和49年

小野正が高校最後の大会で122.5kgのM級Sの日本高校新記録を樹立。

全国高校総体(北九州)F級S真鍋正司、L級S菊川勝也が優勝、TではF級4位、Fe級6位入賞。

第29回国体(北茨城)ではL級、M級2位、F級3位、LH級6位、B級7位

と少年チーム全員が入賞し、成年でもFe級6位に入賞し、天皇杯6位。

昭和50年

第30回国体(亀山)少年F級真鍋和人優勝、成年M級7位。

第20回全日本大学新人戦F級真鍋正司、L級福田輝彦が優勝。

第21回全国日本大学対抗M級2位入賞。

昭和51年

F級の真鍋正司Jr世界選手権選考会で優勝し、第2回大会(グタニスク)に出場し、S2位、T4位に入賞。

第22回全日本大学選手権大会F級真鍋正司、L級福田輝彦が優勝、M級2位に入賞。

全国高校総体(豊科)F級真鍋和人優勝、B級6位に入賞。

第31回国体(有田)少年F級真鍋和人優勝、B級3位、成年M級2位、Fe級、LH級6位に入賞し、天皇杯4位。

第22回全日本大学対抗M級小野正優勝、L級2位に入賞。

第13回全日本社会人M級2位。

昭和52年

Jr世界選手権選考会で52kg級真鍋和人、67.5kg級福田輝彦が優勝し、第3回世界選手権大会(ブルガリア)にコーチ1名を含め3人出場。

第23回全日本学生選手権(尼崎)では52kg級真鍋和人、67.5kg級福田輝彦、75kg級の小野正の3名が優勝。

第37回全日本選手権82.5kg級5位。第23回全日本大学対抗75kg級福田輝彦優勝。

第32回国体(平賀)成年の部67.5kg3位、52kg級4位、82.5kg7位に入賞した。第14回全日本社会人82.5kg3位に入賞。

昭和53年

昭和55年全国高校総体開催地が決まり、準備委員会が会場地新居浜市に設置、高体連専門部として加入が認められた。第13回日韓親善大会(仁川)75kg級で福田輝彦が優勝。

第24回全日本学生選手権(尼崎)福田輝彦が3連勝、52kg級2位入賞。

第4回Jr世界選手権大会(ギリシャ)52kg級真鍋和人5位入賞。

第38回全日本選手権52kg級、67.5kg級、82.5kg級4位入賞。

全国高校総体90kg級5位、56kg級8位入賞。

第24回全日本大学対抗67.5kg級福田輝彦2連勝。

第33回国体(飯山)成年75kg級2位、52kg級7位に入賞。

昭和54年

全日本学生選手権52kg級で3位入賞。

全日本大学対抗戦52kg級で3位入賞。
全国高校総体(明石)67.5kgで4位入賞。
第34回国体(新富)成年で52kg級3位、
75kg級6位、少年67.5級5位に入賞。

昭和55年

55全国高校総体準備委員会を実行委員会に切り換え、準備も整って8月1日～8月5日の間全国から108校336名の参加を得て、冷夏に悩まされたが、大会新記録3、日本高校新1が樹立。学校対抗は1位埼玉栄高校、2位柏木農業高校、3位前橋育英高校であったが、地元選手の入賞はなかった。

全日本学生選手権では52kg級真鍋和人が3年ぶり2度目の優勝。

第40回全日本選手権52kg級で2位入賞。全日本大学対抗52kg級で真鍋和人優勝。第8回全日本実業団大会75kg級で小野正が優勝。

第35回国体(小山)成年の52kg級2位、75kg級5位入賞。

還暦を迎えた理事長黒川晋が110kgJにいとみ102.5kgまで成功。

モスクワのオリンピックに福田輝彦が本県2人目の出場権を得ていたが、不参加。

昭和56年

第41回全日本選手権大会で52kg級真鍋和人が2位になり、第35回世界選手権大会(フランス)に出場し、240kgの日本新記録で3位に入賞。日本選手権では他に82.5kg級で3位に入賞。

第36回国体(安芸川)52kg級真鍋和人優勝、56kg級8位入賞。

第9回全日本実業団大会56kg級で真鍋正司が優勝。

昭和57年

第42回全日本選手権52kg級で真鍋和人が247.5kgの日本新で優勝し、第9回アジア大会(ニューデリー)に出場し大会初の235kgで優勝。

全国高校総体(鹿児島)100kg級のS2位、T3位、67.5kg級ではJ2位T4位入賞。

第37回国体(出雲市)では成年56kg級2位、52kg級4位、82.5kg8位、少年67.5kg級5位に入賞。

昭和58年

第43回全日本選手権52kg級で真鍋和人が2年連続優勝し、第37回世界選手権大会(モスクワ)に出場し5位に入賞。全国高校総体100kg級で5位に入賞。第38回国体(水上町)では、成年52kg級で6位入賞。

昭和59年

第23回オリンピック(ロサンゼルス)に真鍋和人が本県3人目の出場権を得て、

T235kgで銅メダル。

全国高校総体(大館市)では60kg級S2位、T6位、100kg級6位に入賞した。第39回国体(下市町)成年52kg2位、少年60kg5位に入賞。

第21回全日本社会人67.5kg級4位。全日本学生新人大会で56kg級、67.5kg級各々2位に入賞。

昭和60年

第40回国体(岩美)成年56kg級3位、110kg級6位、少年60kg級4位、90kg級6位、52kg級8位入賞。

第22回全日本社会人67.5kg級4位。

昭和61年

第46回全日本選手権52kg級で真鍋和人が3年ぶり3度目の優勝し、第10回アジア大会(ソウル)に出場、247.5kgの日本タイで2位に入賞。

2月25日、新居浜市営重量挙げ練習場新築拡張落成。

第41回国体(御坂町)成年56kg級3位、110kg級8位、少年52kg級5位、82.5kg級6位に入賞。

高校選抜大会で52kg級5位入賞。

昭和62年

第47回全日本選手権52kg級で真鍋和人が2年連続4度目の優勝をし、第49回世界選手権大会(チェコ)に出場。

第42回国体(国頭村)成年52kg級7位に入賞。

12月20日には、新居浜市民体育館を会場として1987日中友好ウエイトリフティング競技大会が新居浜市制50周年行事の一環として開催。

日本選手団は、団長黒川晋、監督細谷治郎、コーチ小野正、選手52kg級真鍋和人、56kg級古賀丈士、60kg級城間忠誠、67.5kg級平仲康、75kg級佐々木保重、82.5kg級砂岡良治、90kg級平岡力、100kg級松尾謙資、110kg級松下忠光、+110kg級富樫嘉文の10選手が中国チーム団長陳冠湖氏ひきいる選手10名、役員4名との交流試合を通じて日中友好につくした。

本県協会長黒川晋は、世界マスターズ



ロス・オリンピック銀メダルの真鍋和人とコーチ・黒川晋

通信大会に2連勝していたが、本年はプエルトリコで大会が行われ、60～69才の部で3位に入賞。

昭和63年

全日本選手権大会に苦難の道を経て真鍋和人が3年連続5度目の優勝をし、ソウルの第24回オリンピック大会に出場、8位入賞。

第43回国体(岩滝町)成年56kg級Sで5位、J6位、少年82.5kg級Jで8位、天皇杯18点。

本県協会長黒川晋世界マスターズ選手権大会に出場し、65～69のグループで優勝した。本県協会長森清から黒川晋は表彰をうける。

平成元年

第44回国体(土別市)成年56kg級S4位、J4位に入賞。

第17回全日本実業団大会52kg級で真鍋正司が優勝、56kg級2位、90kg級5位、団体で6位に入賞。

世界マスターズ選手権大会(デンマーク)に黒川晋が出場。

平成2年

第45回国体(津屋崎町)成年56kg級Sで3位に入賞。

第18回全日本実業団大会52kg級2位、56kg級3位、90kg級4位、5位、団体で4位に入賞。

この年、四国高体連に専門部が認められ、第1回四国高校選手権大会が徳島

県で開催され、新工が団体優勝した。

平成3年

第46回国体(珠洲市)少年60kg級級Sで4位Jで4位に入賞。

第19回全日本実業団大会56kg級で3位入賞。

第7回全国高校選抜大会67.5kg級で3位に入賞。

平成4年

第39回全国高校総体、67.5kg級6位入賞。

第47回国体(羽黒町)少年67.5kg級Sで5位、Jで7位に入賞。

第20回全日本実業団大会56kg級で5位、60kg級で5位に入賞。

平成5年

第21回全日本実業団大会で59kg級4位、60kg級4位入賞。

平成6年

第22回全日本実業団大会で64kg級4位、83kg級5位に入賞。

第39回全日本学生新人大会76kg級で4位入賞。

平成7年3月12日には、故黒川晋をしのび、第24回全日本学生東西対抗選手権大会が新居浜市山根総合体育館で東西大学選抜選手20人の出場のもと開催した。

平成7年

第42回全国高校総体+99kg級で8位入賞。

第50回国体(いわき市)少年99kg級Jで8位入賞。

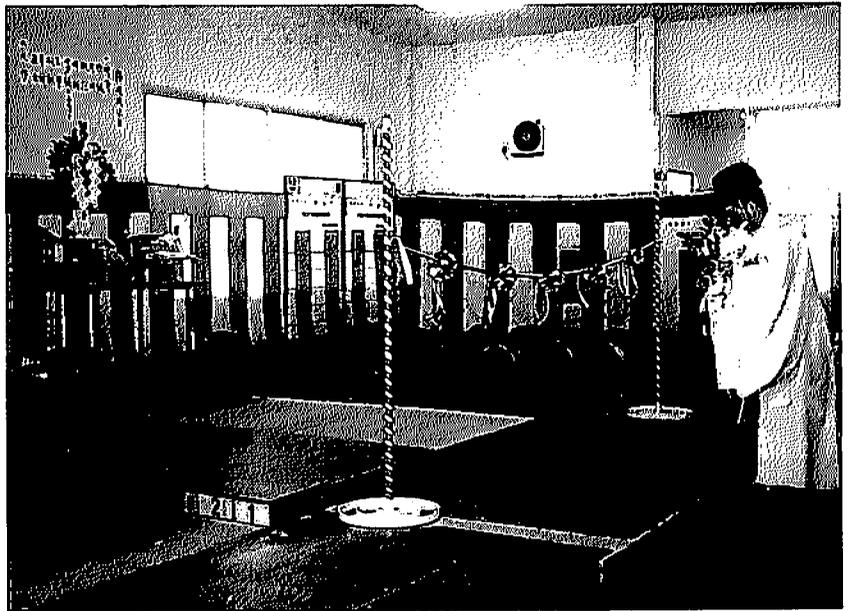
第23回全日本実業団大会64kg級で3位91kg級5位入賞。

第41回全日本学生個人選手権83kg級5位入賞。

第40回全日本学生新人選手権83kg級4位入賞。

重量挙げ練習場の変遷

昭和21年日本WL協会会長の小西英雄氏が普及のためバーベルを新居浜に持ち帰った時は、元副会長清村義明氏の自宅の前庭が練習場で露天、プラット



新居浜市営重量挙げ練習場

ホームもなく地面、しかも夜は裸電球をぶらさげて照明し、近所の人々は何が始まったのかと集まってきた。

昭和26年前黒川会長宅の納屋を改造して約10坪の練習場を作り、愛好者も増し第8回国体チームを編成し日夜強化にはげみ、地元での国体では団体優勝した。第15回オリンピック(ヘルシンキ)に出場した白石勇もこの練習場で汗を流した一人である。この練習場で100kg以上の重量で練習すると50㎡四方に地ひびきをおこし、寝ている子供が目をさますとか、鶏が卵を生まなくなるとか苦情が出て困った。

昭和36年7月には新居浜市に働きかけ、当時から白石勇に続くオリンピック選手を送ろうということで新居浜市の理解も得られ、新居浜市営重量挙げ練習場を造ってもらうことができた。鉄骨平屋建てスレートぶき82.5㎡、練習台2面を有する。経費は市が半分、残り半分は寄付金で150万円であった。当時としては立派なものであり、公営の練

習場としては日本ではじめてであった。練習開きにはオリンピック金メダリストの三宅義信氏を招き盛大なこけらおとしを行なった。この練習場から多くのトップリフターも出し、多くの大学や県のチームの合宿にも使われていたが、老朽化と手ぜまになったため、1984年の真鍋和人のオリンピック入賞を記念して新築の計画が高まり、新居浜市や地域の理解が得られて昭和62年に現在地に新たな練習場が完成した。鉄骨平屋250㎡で10mのプラットホームを2列備えたものができた。

〈現役員〉

会 長	都築 清
副 会 長	加藤 嘉重 天野 伸壽
理 事 長	小野 正
理 事	渡辺 幸一 小野 正一 真鍋 和人 藤田 聖貴 竹迫 次弘 白石 伸二 垣見 公良 越智 康

高知県

事務局 〒780 高知県高知市一宮1565 高知県立高知東高等学校内
梅田 正幸 TEL 0888-45-5731

〈沿革〉

高知県体育協会による新しい競技団体育成「ウエイトリフティング競技」に伴う調査研修のため昭和60年2月23日～2月25日までの3日間、梅田正幸、木村秀俊の両名は他県の組織、活動状況等の実態調査のため上京した。

まず最初に日本ウエイトリフティング協会を訪問、協会専務理事の林克也先生から「協会を設立するための心がまえ」「協会の運営方法」「選手の強化育成」等についてご指導いただいた。次に早稲田大学を訪問、窪田登先生より「ウエイトリフティングの練習方法」「器具の使用方法」についてご指導いただいた。三番目に法政大学重量拳部を訪問、小平監督より「練習方法」そして施設の見学、大学生部員の練習を見学することができた。最後に日本大学重量拳部を訪問、強化合宿中だったので部員の厳しい練習を見学することができた。

帰高後、調査研修の結果を高知県体育協会に報告。この3カ月後、昭和60年5月全国で一番最後の加盟県として、日本ウエイトリフティング協会及び高知県体育協会に加盟承認された。このような経緯で高知県ウエイトリフティング協会は創立したのである。

昭和60年5月高知県教育委員会の「特色ある学校づくり」のご指導のもとに県立高知東高校にウエイトリフティング場の建設計画が持ち上がった。県内では初めての本格的なウエイトリフティング場建設であり、昭和60年7月工事に着工、昭和60年9月に20m×10mの立派なウエイトリフティング場が完成した。県内ではただ一つの施設であるため、完成後は、高知東高校、高知南高校、高知中央高校と高校生部員を中心に、このウエイトリフティング場で活動を続けている。

昭和60年協会創立当時、高知県内にはウエイトリフティング競技経験者及

び指導のできる者が1名だけしかいなかった。ウエイトリフティング競技未経験の高校生部員7名から練習を開始した。四国選手権、全国高校総体、国民体育大会と、各種の競技会に参加することにより、わずかながらではあるが記録が向上している。それと共に競技人口も増加の傾向にある。

協会創立から4年経過した昭和63年度は県内の全選手数20名、協会役員17名と、全国の組織にくらべると、まだまだ後進県である。5年後、10年後には全国の皆さん方の仲間入りできるよう高知県協会、関係者一同今後一丸となり努力を続ける覚悟である。

〈年次別概況〉

昭和60年

高知県ウエイトリフティング協会は、昭和60年5月、全国で最後の加盟県として日本ウエイトリフティング協会及び高知県体育協会に加盟が承認された。高知県教育委員会の「特色ある学校づくり」のご指導のもとに高知東高校にウエイトリフティング道場建設の計画が持ち上がった。

高知県ウエイトリフティング協会の発足が新聞やテレビで報道されると「私もウエイトリフティングの仲間に入れて下さい」と1人の競技経験者が早速名乗りを上げてくれた。その人は高知中央高校教育の蒲原裕二である。彼は大学時代ウエイトリフティングにその青春を打ち込み、関東インカレ、全日本インカレにおいても大いに活躍した経歴の持ち主である。

素人ばかりでスタートした県協会にとっては頼ってもない救いの神であった。早速彼をコーチ兼選手として迎えた。器具は少なく道場の建設工事も進んでいない5月も終わりの頃であった。高知東高校の体育館の一隅に古いマットを敷き、やっと集めた未経験の生徒7名が蒲原コーチの指導で基本動作から練習をスタートした。

歴代会長

初代 澤村 拓夫 (昭和60年～)

第2代 入交 荘一郎 (昭和63年～)

第3代 山崎 啓輔 (平成8年～)

高知県ウエイトリフティング協会が練習を開始して3カ月の8月18日愛媛県新居浜市での第11回重量挙げ四国選手権大会に県協会からただ1人初参加をした。52kg級に出場した蒲原裕二はS70kg、J85kg、T155kgで見事初優勝の栄冠に輝いた。

昭和61年

昭和61年度は高知県ウエイトリフティング協会発足2年目の年である。今年は大きな行事が二つ程あった。まずその一つに、7月下旬、法政大学重量拳部の精鋭25名を高知東高校に迎え、強化合宿を実施した事である。大学のトップクラスの強化合宿であり、県協会の役員選手もこの合宿に参加して共に汗を流した。活気のある合宿であり、県協会にとっても大きな収穫であった。

8月下旬には第12回四国ウエイトリフティング選手権大会が高知県で開催された。協会発足2年目にしては大きな行事であり、運営面においては苦労したが他の三県の役員、審判のご支援、ご協力があり大会を成功の内に終了する事ができた。この大会には100名余の一般、高校選手が参加した。

昭和62年

昭和62年度は、高知県ウエイトリフティング協会発足3年目の年である。石の上にも3年!! 今年は春先の競技会でいきなり好記録を出し、全国に通用する力がついてきた56kg級野並啓洋(中央高校)に「全国大会で初入賞」を目標に協会関係者は一丸となり指導強化を続けた。

しかし実力がありながら体重調整の失敗から入賞させることができなかったのは心残りである。

8月の全国高校総体(北海道)には8名、10月の沖縄国体には9名の県代表を送った。

6位までの入賞者はいなかったものの、出場選手全員が県記録及び県高校記録を更新して健闘してくれたのは大きな

収獲であった。

昭和63年

昭和63年度は、高知県ウエイトリフティング協会発足4年目である。初代会長・澤村拓夫より、二代目会長、入交 荘一郎に会長が交代した。

高知東高校に、ウエイトリフティング道場の二期工事が完成した。全国の高校でもトップクラスのウエイトリフティングの道場である。

今年は75kg級、森脇和弘(高知東2年生)に、全国大会初入賞を目標に協会関係者が一丸となり指導強化を続けた。10月の京都国体には、9名の県代表を送った。75kg級、森脇和弘(高知東)は、Sで102.5kg級を挙げ、8位と同記録であったが、体重差わずか700gで9位となり、入賞を逃したのは心残りである。

平成元年

3月、第4回全国高校選抜ウエイトリフティング競技会が、兵庫県明石南高校で開催された。75kg級森脇和弘(高知東)は総合で8位と健闘した。彼の今後に期待すると共に、全国高校総体、国体に向けて大事に育てたい。

第15回四国選手権では75kg級森脇和弘、+100kg級鳥山一郎、成年52kg級蒲原、67.5kg級野並、100kg級鳥山剛の5名が優勝した。

9月北海道国体には少年男子3名、成年男子3名の選手と監督2名の計8名が県代表として出場した。期待されていた少年男子、森脇和弘(高知東3年)は75kg級Jにおいて132.5kg級を挙げて6位入賞することができた。昭和60年高知県ウエイトリフティング協会が発足して5年目、やっと全国大会で入賞者を出すことができた。北海道国体は高知県協会にとって記念すべき大会であった。

平成2年

今年はウエイトリフティング競技選手権大会が徳島県で開催された。

この大会で60kg級鍋島英滋(高知中央高校)、+100kg級鳥山一郎(高知東高校)の2名が優勝することができた。

平成2年度全国高校総体(宮城県)に52kg級、吉沢英太郎(高知中央高校)、56kg級、橋本雅之(高知東高校)、60kg級、鍋島英滋(高知中央高校)、67.5kg級、角田僚(高知東高校)、75kg級、志和操(高知東高校)、高知県から5名の代表選手が出場した。

森脇和弘(法政大)は第14回東日本学生選手権大会個人戦、82.5kg級、S112.5kg、J147.5kgの自己ベスト記録で6

位に入賞することができた。

今後の活躍が楽しみである。

平成3年

平成3年度は高知県ウエイトリフティング協会発足7年目である。

3月29日第6回全国高校選抜ウエイトリフティング大会が金沢市・石川県県立体育館で開催された。高知県から高知東高校、鳥山一郎が+100kg級に選抜され、出場した。結果はS105kg、J125kg、T230kgのいずれも県新記録で3位に入賞することができた。この種目、県内の選手で表彰台に上がったのは鳥山が初めてである。

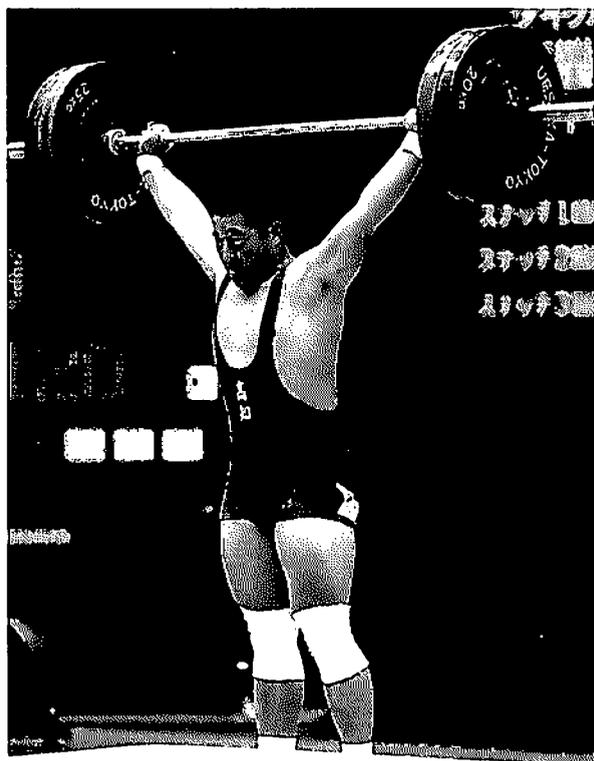
10月13日第46回国民体育大会(石川県珠洲市)が開催された。この大会に、県代表として少年3名、成年4名、計7名の選手が出場した。少年52kg級吉沢英太郎(高知中央)S82.5kg7位、T182.5kg7位、90kg級宮崎雅登(高知東)J135kg8位、成年75kg級森脇和弘(法政大)S117.5kg、T262.5kgで8位。今年は四国選手権での総合優勝、また全国大会では4名が入賞することができた。

平成4年

平成4年度は高知県ウエイトリフティング協会発足8年目である。高校生競技者18名、大学生競技者4名、計22名の競技者で平成4年度の活動を開始した。県内の高校生で全国大会で入賞した選手は1名もいなかったが、森脇和弘(法政大3年)と吉沢英太郎(福岡大1年)の2名が活躍した年であった。森脇和弘は9月19日、第20回東日本大学対抗選手権大会(東京)75kg級T270kgで4位に入賞した。吉沢英太郎は9月5日全日本大学新人選手権大会(埼玉)56kg級T192.5kgで3位に入賞した。また9月25日西日本学生新人大会56kg級T197.5kgで優勝の栄に輝いた。

平成5年

7月20日、第53回全日本ウエイトリフティング競技選手権大会が千葉市ポー



第49回愛知国体少年91kg級Sで3位入賞した梅田幸雄選手

トアリーナで開催された。

この大会に高知県代表として、法政大学4年、森脇和弘が76kg級に出場した。S120kg、J157.5kg、T277.5kgと県記録を大きく更新して3位に入賞した。レベルの高い競技会で3位入賞は、昭和60年県協会発足以来、森脇が初めてである。

平成6年

平成6年は、高知県ウエイトリフティング協会発足10年目である。

3月30日、茨城県石岡市で、第9回全国高校選抜ウエイトリフティング競技大会が開催された。高知県から91kg級に梅田幸雄(高知東)が出場した。S102.5kg5位J115kg8位、T217.5kg8位の成績であった。

8月9日～8月12日、富山県滑川市で平成6年度全国高校総体が開催された。高知県から70kg級中島英清(中央高)、91kg級梅田幸雄(高知東)の2名が出場した。91kg級梅田はS107.5kg(大会タイ記録)、J130kg(県新)、T237.5kg(県新)を挙げて健闘したが、全国のレベルは高く順位は9位に終わった。

10月30日～11月2日、愛知県瀬戸市で第49回国民体育大会が開催された。高知県から成年の部4名、少年の部3名、計7名の選手が出場した。この中で少年の部91kg級に出場した梅田幸雄(高知東)はS120kg(県新、四国高校新)で

3位入賞、Jでは127.5kg 7位、T247.5kg(県新) 4位と、3種目で入賞することができた。県協会発足以来、全国大会で入賞した5人目の選手である。

平成7年

6月18日、第6回四国高校選手権で64kg級池澤慶(中央)が優勝。8月20日四国選手権、少年59kg級池澤慶(中央)が優勝。成年+108kg級烏山一郎が優勝。

8月、鳥取県岩美町での全国高校総体には中央高校から59kg級山本、64kg級池澤、83kg級木村の3名が出場した。10月、第50回福岡国体には少年の部59kg級山本、64kg級池澤、83kg級木村、成年の部59kg級吉沢、83kg級宮崎、91

kg級梅田、+108kg級烏山が出場した。

平成8年

平成8年度は高知県ウエトリフティング協会発足12年目である。2代目会長入交莊一郎より、3代目会長山崎啓輔に会長が交代した。

8月18日第22回四国選手権が高知東高校で開催された。少年59kg級池澤(中央)83kg級、森本(東)の2名が優勝。団体では高知県が少年の部で優勝することができた。

10月第51回国体が広島県で開催された。少年男子59kg級に出場した池澤(中央)はS92.5kg 6位、J115.0kg 5位、T207.5kg 6位と、3種目で入賞するこ

とができた。森脇、烏山、宮崎、吉沢、梅田に次いで全国大会での入賞者は協会発足以来、12年間で池澤が6人目である。

〈現役員〉

会 長	山崎 啓輔		
副 会 長	有沢 駒雄	入交莊一郎	
	谷 昭二	藤崎 宗明	
理 事 長	梅田 正幸		
常務理事	蒲原 裕二	森脇 勲	
	松田 展栄	北岡 則都	
	徳久 徳		
理 事	森脇 一博	烏山 一郎	
	宮崎 雅澄		

福岡県

事務局 〒808 福岡県北九州市八幡西区元城1-1 福岡県立八幡中央高等学校内
守 呂 宏 TEL 093-881-2335

歴代会員

- 初代 中村 義麿 (昭和22~)
- 第2代 永露 政夫 (昭和33~)
- 第3代 広田藤七郎 (昭和35~)
- 第4代 佐藤 壮一 (昭和37~)
- 第5代 亀石 敏夫 (昭和38~)
- 第6代 仰木 重利 (昭和59~)

沿革

協会創立に至る経緯

福岡県に協会ができたのは、昭和22年である。昭和23年、第3回国民体育大会が福岡県で開催されることになり、重量拳競技会場は、戸畑市(現在北九州市戸畑区)公会堂で行うことになったが、福岡県にはそれを準備する組織がない。早速、協会をつくらねばならなかった。

伊之坂福岡県体育課長は故美山豊に「重量拳競技の責任者として準備を頼む」と依頼した。重量拳競技を専門的に行ったことのない美山は「協力はするが責任者としては不適である」旨を強調して固辞したが、受け入れられなかった。というのは、日本重量拳協会井口理事長から「美山に協力させよ」というアドバイスがあったからである。

美山は井口とは学生時代の同期生、引き受けざるを得なかった。かくて福岡県重量拳協会が発足、美山が理事長に就任、中央と連絡をとりながら、国体、重量拳競技の準備をはじめた。特に日本重量拳協会理事・遠藤滝軌氏を招き、指導してもらったのは効果的だった。遠藤氏は美山宅に滞在して、助言・協力をおしまなかった。この美山宅で国体のすべての企画が生まれた。設備・バーベルの製作は北九州の工場で完成した。その他いろいろな準備は、主として美山理事長が勤務していた小倉外事専門学校の生徒たちが行った。

さて選手である。地元にはいない。各方面にあたって故森川良彦がF級に出場することになった。彼は中国から引揚げ、小倉の会社に勤務していた。日体大の学生時代にバーベルを少し握ったという経験だけではあったが、遠藤理事の指導により、バーベルを何とかルール通りに挙げるようになった。かくて森川は福岡県における重量拳競技の草分けとなった。

年次別概況

昭和22年

協会創立し、理事長に美山豊就任。

昭和23年

第3回国体を北九州市で開催。

昭和24年

第4回国体F級森川5位入賞。

昭和31年

萩尾啓二第11回国体F級初優勝。美山豊、世界選手権に監督として参加。

昭和33年

萩尾啓二、第3回アジア大会F級第3位に入賞。

昭和35年

第1回西日本学生選手権大会を北九州大学で開催。

昭和37年

第1回九州選手権大会を筑後市で開催。同時に第1回福岡県選手権大会を開催。

昭和38年

亀石敏夫会長就任。仰木重利が事務局長に就任。この年、仰木事務局長の努力により、福岡県高校体育連盟に加入。

昭和42年

第2回日韓親善競技大会の日本選手団の監督に、美山理事長が任命された。同年のメキシコ・プレオリムピック大会に亀石会長が監督、美山理事長がコーチとしてメキシコに派遣された。

昭和43年

第3回日韓親善競技大会がソウルで開催され、仰木事務局長が日本選手団の監督として遠征。

昭和44年

北九州市ウエイトリフティング協会設立、中道正二会長、仰木理事長となる。これを機会に、第1回北九州市ウエイトリフティング競技大会を開催した。

昭和46年

仰木事務局長、福岡県高体連北部理事長就任のため、事務局長辞任。園田理事を事務局長に任命した。

昭和47年

全国高校総合体育大会が福岡県開催に

決ったとき、ウエイトリフティング競技は北九州市で開催されることになり、高体連充実につとめた。県協会と県高体連ウエイトリフティング専門部は、常にスクラムを組み、事に当たって今日に到ったので、49年全国高校総体を目指して努力することを再確認した。なお、九州連盟も協力援助することを申し合わせた。

昭和48年

49年全国高校総合体育大会のリハーサルとして、九州高校総体ウエイトリフティング競技を北九州市若松文化体育館において開催した。

昭和49年

8月(2、3、4、5)日、北九州市若松文化体育館において、全国高等学校ウエイトリフティング競技大会が行われた。この機会に競技の設備器具が整えられた。

北九州市開催5種目(ウエイト、ハンド、ソフト、弓道、体操)の北九州市実行委員会競技部長に仰木重利が任命される。第28回世界選手権大会役員として仰木重利を派遣された。

昭和50年

第10回日韓親善ウエイトリフティング競技大会開催のため、実行委員会を設置し、北九州市田辺助役が委員長となる。事務局長に北九州市教育委員会栗林部長が就任、事務局を体育課内に置いて、大会開催の準備をした。

5月18日、北九州市総合体育館において第10回日韓親善ウエイトリフティング競技大会が開かれた。

大会は北九州市の全面的な援助により開催することができ、協会の長年の夢がかなったのである。このときの日本選手団長には亀石会長が任命された。仰木重利、理事長に就任。

昭和53年

1978年日中友好ウエイトリフティング競技大会副団長兼監督として仰木理事長が任命された。

昭和54年

仰木理事長がジュニア世界選手権大会日本選手団長としてハンガリーに派遣された。

昭和55年

美山豊副会長死去。創設当時より協会を支えてきた美山副会長の死は、協会にとっての一大損失であった。

昭和56年

石川彰、事務局長に就任。

昭和58年

亀石敏夫会長死去。仰木副会長が会長を代行する。

昭和59年

協会役員全員からの懇願により、仰木重利副会長が会長に就任。石川彰、理事長に就任。

昭和61年

1986年日中友好ウエイトリフティング競技大会日本選手団団長に仰木会長が任命される。

守昌宏教諭、県立八幡中央高校に赴任。また、前年度、南和文教諭の赴任した県立光陵高校はとびうめ国民体育大会に向けての協力校となり、ウエイトリフティング部が創設。

この年、福岡県ウエイトリフティング選手権大会を開催する。

全国高校総体52kg級で、福永孝(筑紫工高)が2位に入賞する。

昭和62年

全国高校総体52kg級で石橋佳幸(筑紫工高)2位入賞。

守昌宏事務局長に就任する。

昭和63年

とびうめ国民体育大会に向け、強化指定校・強化指定選手が選ばれ、本格的強化が始まる。中学生の強化体制の整っていない本県では、この年入学の高校1年生を対象に、将来性ある者を確保し強化する以外に道はなく、県内の高校指導者にとって部員確保は大きな課題であった。成年は、幸いにして県内の大学に多数進学していた者がいたため、その学生を強化母体として選抜することにした。また、協会が主導する合宿は成年・少年合同で実施することを基本とし、仰木会長自らの陣頭指揮のもと、結束を高めていった。

強化指定校は、前年度新人大会で団体1位の筑紫工高と2位の八幡中央高の2校が選ばれ、この年、八幡中央高も正式に部へと昇格する。

福岡県競技力向上対策事業が行われ、滋賀県、愛媛県へ初の遠征を行う。これらの合宿・遠征により次年度の強化指針を得ることができた。

1988年日中友好ウエイトリフティング



日中友好ウエイトリフティング競技大会(リハーサル)

競技大会日本選手団団長に仰木会長が任命される。

関常任理事、県高体連ウエイトリフティング専門委員長に就任する。

平成元年

仰木会長、(社)日本ウエイトリフティング協会副会長に就任し、6月10日、小倉「ひびき荘」において就任祝賀会を開催する。全国各地から祝賀に駆けつけ、100人以上となる。県内はもとより、九州にとっても大きな誇りとなる。10月20日～22日、とびうめ国民体育大会会場地の津屋崎町においてリハーサル大会を開催。

11月19日、日中友好ウエイトリフティング競技大会を津屋崎町民体育館において開催。日本選手団団長に仰木会長が任命される。

平成2年

とびうめ国民体育大会開催が決定してから後協会が一丸となって取り組んできた強化の成果が徐々にあらわれてきた。3月28日～29日に山梨県で開催された全国高校選抜大会で岩井和弘(筑紫工高)が90kg級で初優勝、その他加藤(筑紫工高)、山本(八幡中央)、甲斐(八幡中央)ら4名が5位以内に入賞した。

5月のゴールデンウィークには、過去に国体で団体優勝を経験した兵庫県へ遠征。全国でも練習量の多さで知られる兵庫県の選手の中、厳しい練習の日々を過ごした。7月には、昨年はまなす国体を開催した北海道へ遠征。

このような強化の結果、8月の全国高校総体では岩井の91kg級優勝をはじめ、山本の67.5kg級2位など選抜を上まわ

る成績を収めた。

成年においても、九州選手権大会において沖縄県を破り、初の団体優勝で優勝旗を手にした。強化合宿は、8月9日と筑紫工業高・兵庫県・津屋崎町と続けて実施し、(社)日本ウエイトリフティング協会からは、桜井勝利専務理事を招へい、大会までの具体的コンディショニングを指導していただき、なすべきことは全てやって大会に望んだ。

こうして迎えた大会では、初日の最初の競技で成年の伊禮が優勝し、幸先のよいスタートを切った。

結局、出場した7人全員が入賞した。特に少年の3名は優勝を含む全種目3位以内に入る快挙であった。

この結果、はまなす国体の閉会式終了後に選手団で秘かに誓い合った「総合8位以内入賞」の目標を達成でき、当然のことながら得点も予想を大きく上回った。本県選手団一同期待で胸をふくらませて成績の発表を待った。公式記録員から順位の発表があり、「4位福岡県76点」と大きな声が響き渡ったとき、会場をつつむどよめきが起こった。選手団を代表して、守が表彰台に上がり、日本協会副会長である仰木会長から4位の賞状と花束を受け、壇上の2人が握手をしたとき、会場からの大喚声が上がった。入賞を目指して強化に取り組んできた協会役員及び選手はこの時の感動を生涯忘れることはない。

〈とびうめ国民体育大会監督選手〉
成年監督 原田 好雄(九国大付高)
52kg級 伊禮 淳(安川電機)



とびうめ国民体育大会で団体4位の授賞式

56kg級 福永 孝(九州共立大)
 75kg級 福田登美男(九国大)
 82.5kg級 守 昌宏(八幡中央高)
 少年監督 南 和文(光陵高)
 67.5kg級 山本 俊康(八幡中央高)
 90kg級 岩井 和弘(筑紫工業高)
 100kg級 加藤 大明(筑紫工業高)
 全員入賞 総合成績第4位得点76点

石川理事長、青山女子高校教頭に就任の為、理事長辞任。後任に松本副会長が理事長を兼任する。

平成4年
 立花信生(八幡中央高)全国高校選抜大会、全国高校総体、国体の3大会に優勝する。
 関常任理事、全国高体連ウエイトリフティング部会常任委員に就任する。第1回全九州高校ウエイトリフティング競技選抜大会を津屋崎町において開催。松本三千男が理事長辞任。守事務局長が理事長に就任する。
平成5年
 仰木会長、文部大臣表彰(体育功労賞)

を受賞。11月27日に小倉「ひびき荘」において祝賀会開催。関常任理事、九州高体連ウエイトリフティング専門委員長に就任。

第48回国体(徳島県)全員入賞。

成年 今吉 正憲 54kg級S 7位
 福永 孝 59kg級S 7位
 福田登美男 83kg級S 4位
 松原 誠 91kg級SJ 5位

少年 牧山 和広 54kg級SJ 3位
 藤瀬 雄介 70kg級SJ 4位
 長崎 大輔 91kg級S 7位

この国体の少年54kg級Sにおいて牧山和広が95.5kgの日本高校新記録を樹立。

平成6年

第49回国体(愛知)少年の部83kg級において森田宗弘(光陵高)が2位に入賞。

平成7年

第55回全日本選手権大会91kg級において松原誠から310kgで4位に入賞する。仰木会長が、(財)日本体育協会より国体表彰を受賞。

〈現役員〉

会 長 仰木 重利
 副会長 仲村辰五郎 別府正三郎
 理事長 守 昌宏
 常任理事 関 泰治
 理 事 渡辺 八郎 上田 征一
 南 和文